古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第二部

第Ⅵ章　古墳時代の倭国　　「蝶の雑記帳 130-6」

これまで明確な歴史像が描かれていない古墳時代に、
「太陽の道」の視点から事物に結びつけた実証的な論拠を
示して、倭の五王がどこにいたかを論じます。

第Ⅵ章　古墳時代の倭国 …… 171

ｉ．古墳時代前期、太陽の道の移転 …… 171

ii．古墳時代後期の太陽の道を体現する神殿 …… 183

iii．倭の五王の時代 …… 195

iv．古墳時代の奈良盆地 …… 207

ｖ．500 年代の倭国 …… 216

第VI章　古墳時代の倭国

ｉ．古墳時代前期、太陽の道の移転

前章の終わりあたりで、卑弥呼の時代は古墳時代への過渡期だったのだろうという見方を述べた。『三国志』は、倭から魏への最初の遣使(238 年)のあと邪馬壹国の王卑弥呼に印綬を授け、もう一度の往来のあと 247 年には南に隣接する狗奴国との戦争を報告したので、魏は帯方郡から太守を派遣して詔書（しょうしょ）と魏の軍旗と檄文（げきぶん）を授けている。続いて、卑弥呼が死ぬと、男性王を立てようとしたらまた王位継承の武力衝突が起きて死人まで出る騒ぎになったので、もう一度おそらく王家の少女（宗女）壹与を王に立てた、と記す（魏使である太守はこの出来事のあとに帰国している）。この記述は倭国が全般的に緊迫した情勢にあったことを示している。

ところで、次の晋の史書『晋書』「武帝紀第三」が、前年 12 月に魏からの禅譲によって新政権を建てた翌年 266 年の 11 月に、「倭人が来て方物を献じた」と書く。これを、邪馬壹国が先代からのよしみを通じようとしたととらえることができる。そして、他方の「列伝東夷」のところには『三国志』の断片的引用であるかのように卑弥呼のことしか書かないから、200 年代中期の邪馬壹国に変わったことは起きなかった、と推測できる。つまり、狗奴国との戦争は邪馬壹国優位のうちに収束した、と考えてよいだろう。さらに言えば、『晋書』「列伝東夷」が倭国について『三国志』の断片的引用しか記さないことは、倭国がどのような国かという晋帝国の見方が魏の時代と変わらなかったことを示している。この問題は次節で議論しよう。

卑弥呼から 200 年ばかり前の倭奴王がすでに後漢から金印をもらっていたこと、第Ｖ章で挙げた九州北部にある四つの弥生遺跡の卓越した出土品、『三国志』「東夷伝」の記述、および、上の段落で見た『晋

書』の記述などを総合的に判断すれば、次のように考えることができる。邪馬壹国が主導する“倭国連合”は、相当な文明度に達して大きな勢力をもち、伊都国から朝鮮半島南岸に達するシーレーンを制し、博多湾から東と南に伸びる海上交易路もおさえていた、と。南隣の狗奴国との戦争にも、魏の帯方郡の太守が派遣されてきた。軍人であるその太守が、魏帝国の詔書と軍旗と檄文だけを持ってきたと考えるのはナイーブすぎるだろう。少なくとも中国製の武器類など援助物資を持ってきて、軍事作戦に助言を与えた、とわたしは想像する。したがって、“倭国連合軍”は優位に立って戦いを進め、結局、南の敵対国を服属させた、と推定することができる。邪馬壹国を中核とする“倭国連合”はしだいにその覇権を九州島全体に拡大しただろう。その過程で、倭国王である邪馬壹国の王の権威はいっそう強まり、倭国の王位には長く続いてきたその家系の者しか就けないという慣例が定着したことだろう。そうして倭国は、世界のどこでもその段階を経たように、王の支配する国家体制へ進んでいったというのが、本書の提出する見方である。この第Ⅵ章第ｉ節は、この見方を証拠づけようとする導入部である。

われわれは第Ⅴ章の終わりの方で、平原遺跡 1 号墳から須玖岡本の熊野神社古墳へと弥生時代の墓制が変化しつつあったことに注目し、前者で墳墓の前に鳥居が建てられ、後者ではさらに墳丘の手前に礼拝する場所がもうけられた、と推定した。現存する熊野神社は、第Ⅰ章で考えた「太陽の道」の祭事をとりおこなう神社というよりも、墳墓のための社という見方へ誘う。墓制のこの変遷の先に前方後円墳がある、と考えることができる。

熊野神社境内の熊野神社古墳から南南西 2km のところに日拝塚（ひはいづか）古墳という前方後円墳がある（新幹線博多南駅近く）。春日市のサイトと Wikipedia によれば、墳丘の径 43m・周溝を含めると全長 61m、横穴式石室は奥行き 3.6m・幅 2.6m・高さ 4m。副葬品は昭和期の盗掘の際に

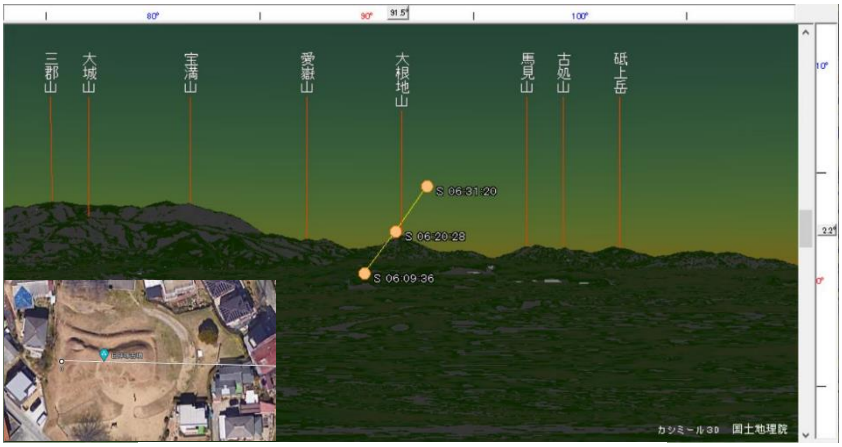
持ち出されたが、金製垂飾付耳飾・環頭大刀柄頭のほか銅鏡・装身具類・武器・工具・鉄製輪鐙 3 組などの馬具・須恵器などが回収されている。この古墳は春日市～太宰府市一帯で最大級の古墳という。『三国志』が記す卑弥呼の「径百余歩の大きな塚」に、1 里＝300 歩≈400m という古代にあったと想定されてきた定義を当てはめて解釈する人がいるが、邪馬壹国の中心が春日市にあったと考える本書の見方からすれば、「里」単位が 400m ではなかったように、「歩」単位もその想定と異なり歩幅程度だったと考えられる。

現在日拝塚古墳は 500 年代につくられたと言われている。その判断は、邪馬壹国が奈良盆地にあったとする見方に立ち、前方後円墳の墓制も奈良盆地から全国に広まったと考える主流の日本古代史観に基づいている。しかし、かつて銅鐸は近畿地方に起源をもつ青銅器とする考え方が主流だったのに、銅鐸の鋳型が須玖遺跡群で発見されてからは、銅鐸も九州北部から広まったと考えられるようになった例がある。前章Ⅴが論証したように、邪馬壹国が福岡都市圏なかでも須玖遺跡群あたりにあったという蓋然性が圧倒的に高いのである。九州の前方後円墳の築造年代について批判的再検討が必要だ、と考える。

日拝塚古墳を太陽の道の観点から考察しよう。「日拝」を「ひはい」と読むのは日本語として違和感を抱かせる。この漢字表記と“逆重箱（じゅうばこ）”読みは漢字が使用されるようになってからのことで、元はこなれた和語があったにちがいない。日を拝（おが）むというが、どの方向の太陽を拝んだのだろうか。この前方後円墳はほぼ東を向いている。カシミール 3D で東方の眺望を描いてみよう。それが図VI.1 である。この図には、春分秋分の日の出が描いてある。

春分秋分の日に太陽は、日拝塚からおおよそ真東（方位角 91.5 度）16km のところにある大根地（おおねち）山という目立つ円錐形をした山の頂上から昇る。日拝塚の被葬者はその大根地山から春分秋分の日に昇る太陽を拝むことを願ったということである。図VI.1 に添付した左下の図は、

Google map で、日拝塚から大根地山までの距離を測るために引いた白い直線を写し込むようにして日拝塚の部分を拡大して複写したものである。白線は、東西方向からわずかながら傾いて、前方後円墳の中心軸に一致することが分かる。日拝塚古墳が東方の大根地山の方角を指しているのは、平原遺跡 1 号墳が霊山飯盛山の方角を指していたことを思い出させる。補足すれば、以前 web で日拝塚古墳を見たときには普通の前方後円墳の姿形をしていたが、2024 年現在、調査のためか掘削されている。



図Ⅵ.1　日拝塚古墳から見る春分秋分の日の出

こうして、大根地山は「太陽の道」の標識となる霊山と推定できる。その推定は次の事実によっていっそう確実になる。大根地山頂直近の東側に大根地神社の上宮があって、その祭神は、若杉山のイザナギや飯盛山のイザナミを圧倒するほどすごい。高天原の天神(あまつかみ)七代（イザナギ・イザナミに至る七代の夫婦神）と地上の王につながる地神(くにつかみ)五代（天照大神すなわち日神(ひのかみ)・その子アメノオシホミミ・日神の孫ニニギ・ヒコホホデミ・ウガヤフキアエズ）である。そして、大根地山が弥生時代の霊山若杉山・飯盛山・宝満山とならんで後世まで修験道の霊山として人々に崇拝されたことが、大根地山が霊山であったと証言するのである。

この神々のオンパレードは、説話としての神話が年月の経過ととも

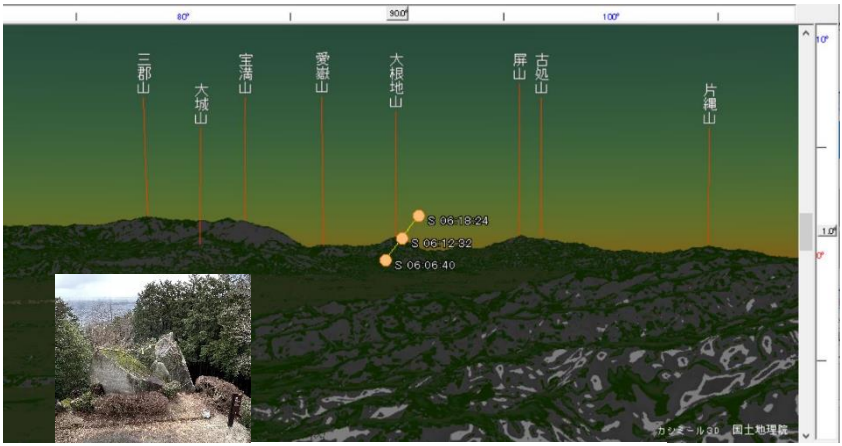
に膨張したことを教え、地神五代の系列は地上の王家が祖先を日の神につないだことを示唆する。現実の地上の王とも考えられる高祖ヒコホホデミが三雲南小路遺跡そばの細石神社に祀られているいわれをあとづけしてもいる（高祖（こうそ）とは中国で王朝の始祖を意味する。イザナギを祭神とする若杉山の太祖神社は、漢王朝の始祖劉邦が太祖（たいそ）と呼ばれるのにあやかっているのだろう）。この時代に神話は体系化されたのである

こういうわけで大根地山は、弥生時代の太陽の道よりもさらに格の高い「太陽の道」の霊山とする見方へわれわれを誘導する。それを確認しよう。弥生時代の太陽の道は、図Ⅰ.6 が示すように、東の宝満山と西の飯盛山がほぼ同一緯度線上にあるという自然の偶然に触発されて古代人が設定したものであった。大根地山が太陽の道の霊山だとすると、太陽の道を設定するほどの指標が大根地山の真西にあるはずだ。国土地理院の地図で探してみると、西方には標高 597m の油山から北に下っていく尾根があるが、油山山頂は大根地山の真西よりも南側に位置する。もっと探すと、その尾根の東側約 1 km に地理院の三角点が置かれ、その北側に夫婦岩と書かれている。山なのに、太陽の道にかかわる夫婦岩がある。地理院地図には夫婦岩の地点が描かれていないので、Google map を拡大して夫婦岩を確認すると、そこの緯度は北緯 33.5189 度だ。他方の大根地山頂の三角点の緯度は 33.5195 度である。緯度の差は宝満山と飯盛山の緯度の差よりも小さく、驚くべき精度で東西線上に並んでいるのである。標高を求めると、大根地山の頂上が 652m で夫婦岩は約 271m である。

三角点が置かれていることから分かるように、夫婦岩の場所は北と東の視界が開けている。ただし、図VI.2 に添付した夫婦岩の写真が教えるように、東側に植えてある針葉樹にさまたげられて、今は大根地山が見えない。油山の夫婦岩はほぼ平たくなった小さな尾根の北端にあり、琉球の斎場御嶽の陰陽石よりも小さい。その北端の北と東は急に斜

面となり、現在、二つのうちの東側の岩の下の土が流れ落ちて夫婦岩は夫婦別れの危機にあり、鎖でなんとかくい止められている（二つの岩はその小さな尾根の先端に置かれたのではないかと、かすかな疑問が湧く）。

図Ⅵ.2 に、油山夫婦岩から春分秋分の日に昇ってくる太陽がどう見えるかをカシミール 3D の画像で示そう（カシミール 3D のカメラは、夫婦岩の東に植えてある針葉樹を透視して大根地山を写す）。夫婦岩のところから見ると、春分秋分の太陽はほぼ大根地山の頂上から顔を出すのである。長門二見夫婦岩の後方から見ると太陽が沖ノ島に沈むように見えるのと反対に昇るのだけれども、名にふさわしく「太陽の道の夫婦岩」という役目を果たしている。この符合は、油山夫婦岩の地点の標高がわりあい高く、東方 21.5km のところにある大根地山を見上げる仰角が 1 度足らずだからである（水平面を基準にした仰角が、図Ⅵ.2 の右端に小さい文字で書かれている）。仰角 1 度足らずなら、地球の向こうから出てくる太陽はわずかにしか南に逸れない。現代人の理屈はおいて、図Ⅵ.2 のような春分秋分の日の日の出の見え方が、地理院地図をもたない古代人に、大根地山が油山夫婦岩の真東にあることを教えたのである。



図Ⅵ.2　油山夫婦岩から見る春分秋分の日の出

図VI.2 は日の出を拝む夫婦岩が大根地山と東西線上に並ぶことを示し、図VI.1 はその地域最大級で王墓と考えることのできる前方後円墳が同じく大根地山の方向に向いていることを示す。大根地山―油山夫婦岩を結ぶ東西線は、第Ⅰ章で弥生時代の太陽の道について抽出した太陽の道の要件を満たし、春分秋分の太陽の道として適格である。

それでもわたしは物足りなく思う。というのは、「太陽の道」を主宰し設定する王の墓がこの東西線上にないからである。弥生時代の「太陽の道」上には三つの弥生遺跡が並び、それが偶然ではないと保証した。しかも、最古の王墓と目（もく）される墓が見つかった吉武高木遺跡では墓群のすぐ東側に建物の跡が発掘されて、そこに“王”の住居があったと考えられている。その発掘調査は、まわりが現代でも田園地帯であるという好条件に負っている。三雲南小路遺跡と須玖岡本遺跡は、そうとう古くから住民の住居があったと思われる地域に位置し、王の住居跡は見つかっていない。けれどもそこには現代も細石神社と熊野神社があって、そこが太陽の道の祭事を行なう場所であったとする推定を許す。

ところが、日拝塚という太陽信仰に関連していると考えることのできる“王墓”は、大根地山―油山夫婦岩を結ぶ東西線上にない。古墳時代になると、『三国志』「倭人伝」が示唆するような王の都はさらに充実した都市に発展しただろう。そうすると、都市のなかに規模が大きくなった墳墓を造ることがむずかしくなる。墓制が変化したと考えなければならない。日拝塚の場所はそれを意味している、と考えることができる。弥生時代後期の須玖岡本付近でもむずかしかったのだが、われわれは、古墳時代の「太陽の道」の主宰者がいた“王宮”を見つけ出さなければならない。

大根地山―油山夫婦岩を結ぶ東西線は福岡都市圏の住宅街を通っていて、現地を知らない人は“王の宮”の探索はむずかしいと思うかもし

れない。しかし、古代ここには「太宰府」という国家の重要な機関が置かれていた。今でもその重要諸施設は痕跡をとどめていて、ちょうど大根地山―油山夫婦岩を結ぶ東西線一帯にある。中心部には「太宰府政庁跡」があり、大きな建物や門の礎石などと周囲にめぐらされた塀の痕跡が残されている。この一帯の重要遺跡は後代のものだがその分、倭国史について須玖岡本の遺跡群よりも確かな情報を与えてくれるにちがいない。

図Ⅵ.2 を見ると、宝満山の西側手前に大城(おおき)山という山が示されている。名がその重要さを主張している大城山山頂からほぼ真南の山すそ、夫婦岩から大根地山を見通す東西線（図Ⅵ.2 の中心軸）と交差するあたりに、太宰府政庁跡がある。この段階では仮説にすぎないが、本書は、大根地山―油山夫婦岩を結ぶ太陽の道の祭祀場はそのあたりにあった、と考える。図Ⅵ.3 に Google map を用いて付近の拡大図を示し、この仮説を説明しよう。上方の白線は、大根地山から夫婦岩までの距離を測るための直線で、精確に東西方向を向いていることが確認できる。また、そこに書きこまれている数字が、大根地山から太宰府政庁跡の中心軸まで 8.7km 弱であることを教える。

太陽の道と考えている白線は、古代にはこのあたりで山の中を通っていたと推測される。「太陽の道」を尊重するといっても、その山中では祭事を行なうのに不便だろう。図に赤い丸で示した山すその終わる場所あたりなら祭事を営むのによい場所だと思う。第Ⅶ・Ⅷ章で議論するが、平安時代まで存続した太宰府政庁は隋の大興城をモデルとしたと考えられる。もし古墳時代にこの太陽の道を主宰する王がいたとすれば、同時代の中国の都城と同じように、太宰府政庁跡の北側の空き地が王の宮を置くのにふさわしい。その北には今は直線でない山の辺(べ)の道が東西方向にあり、その辻の北に現在日菅寺という寺がある（ただし、日菅寺は 1915 年に建てられたというから、古代の太陽の道とは関係な

いだろう）。そのあたりなら、すぐ南に住んでいただろう王と卑弥呼のような王家の巫女が祭事を行なうのにふさわしい、とわたしは考える。こう考えて、赤い円で示したあたりに、須玖岡本の熊野神社のような「太陽の道」の祭事を営む社があった、と仮定しよう。古墳時代前期のことに後代の事象の助けを求めるのは不本意だが、読者についてきてもらうために、のちに太宰府が条坊（じょうぼう）で区画された都城になったとき、東西の条の北端は赤い円のあたりを通り南北の坊の中心大路もそこを通っていた、つまり、太宰府という都城の基点は赤い円の場所だったことを言い添えよう。図VI.3 の図に太宰府政庁跡の中心軸から南に延びた道が「朱雀大通り」と書かれていることが、それを証言している。

ここで注意書きを加えると、しだいに明らかになるが、古墳時代には

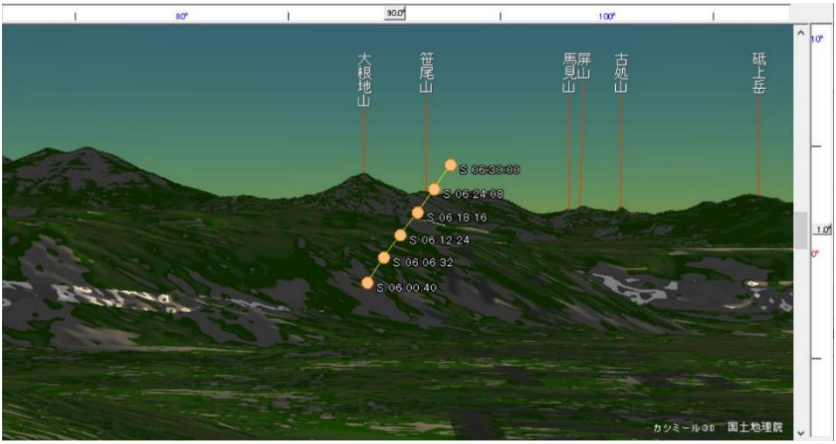
図VI.3　都府楼跡付近拡大図、観世音寺・戒壇

「太宰府」ということばは使われていなかった。代わりに菅原道真が漢詩で用いた「都府楼」を参考にして“都府”という語を用いよう。そうすれば、あとで出てくる「都督府」にも対応できる。

上で述べた推定が成り立つか、二至二分の日の出を示すカシミール3Dによる画像を見て検証しよう。

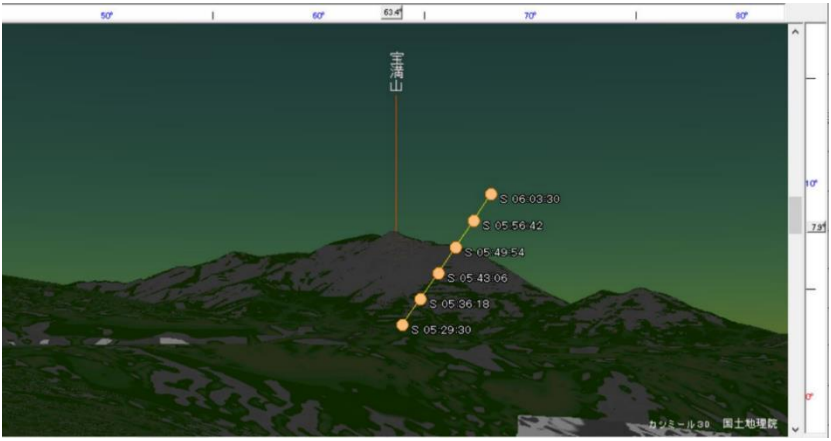
まず図Ⅵ.4 に、カメラを真東に向けて春分秋分の日の出がどのように見えるかを示す。カメラの位置から大根地山まで 9km 弱しかないから、精確に同じ緯度にない大根地山は方位角 90 度よりも 2 度程度北に見えるが、太陽は、第Ⅰ章で見た弥生時代の太陽の道の“焦点”から見た春分秋分の日の出と同じように、大根地山の根元から出て山の端(は)に昇ってきたように見立てることができる。図Ⅵ.3 の赤い円内は、油山夫婦岩から大根地山に延びる太陽の道の祭事を営むのに適格である。

夏至の日の出はどう見えるだろうか、図Ⅵ.5 が答えてくれる。図Ⅵ.3 の赤い円内から見ると、とても大きな磐座が頂上の宝満山は、北東側にある少し高い主峰に続くもっと高い山並みを背後に従える大きな山塊



図Ⅵ.4 都府楼跡北日菅寺付近から見る春分秋分の日の出

として見え、夏至の日の出はその山塊の根元から出てくると思いなすことができる。宝満山は弥生時代の太陽の道を代表する霊山だったが、こんども新しい太陽の道の霊性を高める大事な霊山として役目を果たすのだ。

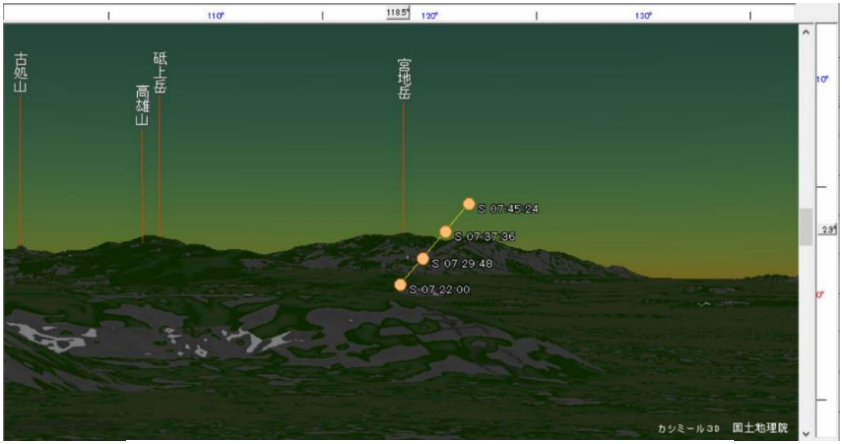


図VI.5　都府楼跡北日菅寺付近から見る夏至の日の出

同じ場所から望むと冬至の日の出も、図VI.6 に示すように、やはり一つの山塊から昇るように見える。標高約 339m の単独峰であるこの山は宮地岳という名をもつ。すでに出た宮地嶽と区別するためか、いかめしい「嶽」ではなく「岳」という漢字が用いられる。いずれにせよ、その名は太陽の道に関連することを表わしているだろう。

この山の南西のふもとに天山（あまやま）という高天原崇拝にちなむと考えられる大字名をもつ地区がある。そこに「高木神社」があり、祭神は高皇産霊（たかみむすび）という名の神である。先ほど大根地神社の祭神が天神七代・地神五代の神々であることを述べたが、『記・紀』神話では、宮地岳天山の高皇産霊神とは、造化の三神の一人で、日の神（天照大神）の孫のニニギが天下（あまくだ）るとき、日の神よりも采配をふるったように書かれた神である。そして、タカミムスビの娘は栲幡姫（よろずはた）という名でニニギの母神とされる。つまり、

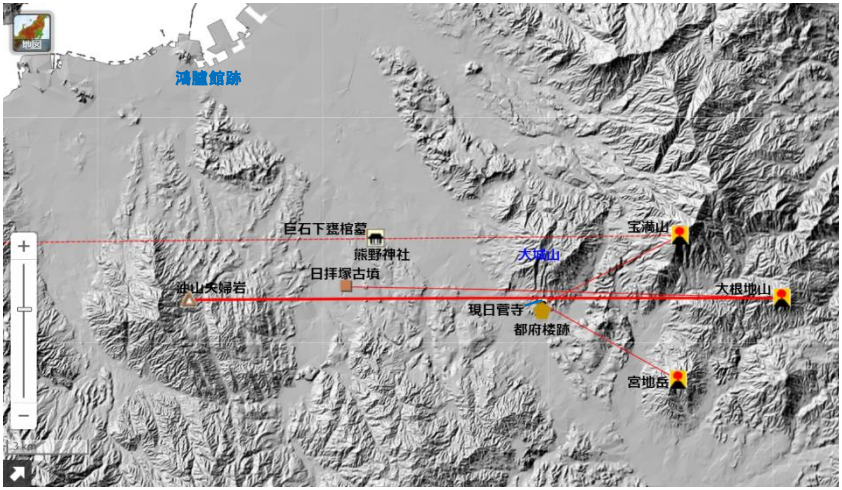
地上の王の直接の父とされるニニギを日の神につなげるだけでなく、造化の神にまでつなぐことがなされたのである（タカミムスビ神はニニギの外祖父の立場から采配をふるったわけだが、筋立ては現実の王権にありがちなことを反映している）。この神話を知れば、宮地岳が冬至の太陽の道の霊山とされたことがうなずけるだろう。



図Ⅵ.6　都府楼跡北日菅寺付近から見る冬至の日の出

図Ⅵ.1 とⅥ.2 に図Ⅵ.4・Ⅵ.5・Ⅵ.6 を加えれば、大根地山・宝満山・宮地岳を霊山とする新しい太陽の道、春分秋分と夏至と冬至の三つの太陽の道が設定されたとする本書の仮説が説得力を増す。図Ⅵ.7 にそれを図示しよう。この図は、大根地山―油山夫婦岩を結ぶ春分秋分の太陽の道が、宝満山―飯盛山を結ぶ太陽の道が移転したものという本書のアイディアを後押ししてくれる。そのアイディアとは、熊野神社にあった弥生時代の太陽の道の焦点が、古墳時代にはそこから東南東の大城山の南側ふもとに移転して、巨石下甕棺墓が表現していた東の霊山宝満山を崇拝する王墓が、少し異なる配置となって前方後円墳日拝塚となった、というものである。図Ⅵ.7 は、古墳時代の太陽の道が整然と

整頓されたものになったことを教える。



図VI.7　大根地山を霊山とする新しい太陽の道

ここまでの説明は神話にも言及してきたが、弥生時代の太陽の道の背後にあった神話がもっと大きな体系にまとめられて、太陽の道が図VI.7 のように整頓しなおされ設定されたことが知られる。第Ⅰ章で考えたことからすると、神話の体系化は、その太陽の道を設定した地上の王権が権力を高めたからでもあるという推定に導く。だが、図VI.7 が示しているのは新しい太陽の道だと断定するのは、次節で決定的な証拠を挙げるまでお預けにしよう。

ii．古墳時代後期の太陽の道を体現する神殿

太陽の道は、第Ⅰ章で見たように、祭政一致の王権が公式に設定するものである。政治の面を考察する必要がある。

前章でわれわれは、200 年代の邪馬壹国を中心とする倭国連合が鉄器を活用する新しい時代へ向かいつつある、ととらえた。鉄器は農業生産力を高め戦争を規模の大きいものにする。福岡平野に都をおいていた

邪馬壹国はすでに戸数 7 万の大きな国であり、先に推測したように筑後川流域まで支配を及ぼしていたはずである。それを念頭に図Ⅰ.5 と図Ⅵ.7 が示す地形に注目すれば、太宰府市と筑紫野市の地域が福岡平野と筑後平野を結ぶ回廊のような要地であることが分かる。その地域のなかでも都府楼跡の場所は、福岡平野から南に向かうとき最も狭まったところ（のちに「水城（みずき）」が築かれた）を入って北に大城山を控え、筑後平野に出るのに東側と西側に山々がつらなって防塁となる戦略的な要地である。戦略的なとは、北から南に続く穀倉地帯ににらみを効かせ、軍事・交易上の要路でもあるという意味である。それに、都府楼跡から博多湾西公園南の入り江の南岸のちに鴻臚館（こうろかん）の築かれた所まで直線距離で約 15km で（古代アテナイの外港ピレウスまでの距離約 9km よりも遠いが）、海路のための外港もおさえることができる。

あとのためにも、図Ⅵ.7 の地形図を見ながら補足を加えておこう。都府楼跡の背後の大城山（おおき）と宮地岳とこの図には含まれないが西側の山の連なりにある基山（きやま）の三つの山には、それぞれ、大野城・阿志岐城・基肄（きい）城と呼ばれる古代の“朝鮮式”山城の跡が残っている。通例、築城年代は『日本書紀』の記述のままに百済と倭の軍が唐と新羅の軍と戦って負けたころとされている。しかし、敗戦後朝鮮半島占領中の唐軍から千人もが来るという状況のなかで、泥縄式に「水城（みずき）」と三つの山城を築造していたと考えるのは、現実の政治と軍事を考慮しない単純すぎる考え方である。もっと以前に「都府」と呼ばれるほど発展した都市になった情勢が、時間のかかる大きな工事が必要な山城と防塁を築かせた、と考える方が妥当だろう。

こういうことを総合的に考えてみると、『三国志』の記述する倭国が順調に発展したら、おそらく都府楼跡として残るあのあたりに都を造営するのはほとんど当然の成行きだったと言えるだろう。そしてその場所は、前節が示したように太陽の道の焦点としても適地だった、というのが本書の考え方である。しかし、証拠になる文献資料を挙げない議

論をこれ以上続けるわけにいかない。

議論を、第 i 節で提起した新しい「太陽の道」を支持する物的証拠に進めよう。九州には宇佐宮と宗像大社という二つの大きな神社がある。この二つの神社が格別の神殿だと気づいたのは、40 年前に文献[3]の著者水谷慶一が制作した NHK の番組を見たときである。実はそのときの推理は本章の議論の順序とは逆だった。いきなり、「宗像大社を通る子午線は驚くべき精度で都府楼跡の中心線と重なり、宇佐宮を通る緯度線は都府楼跡のすぐ北を通る」という核心に到達したのである。こんなことが偶然に起こるはずはない。その発見は、ここまで述べてきた太陽の道の議論への展開をもたらした。

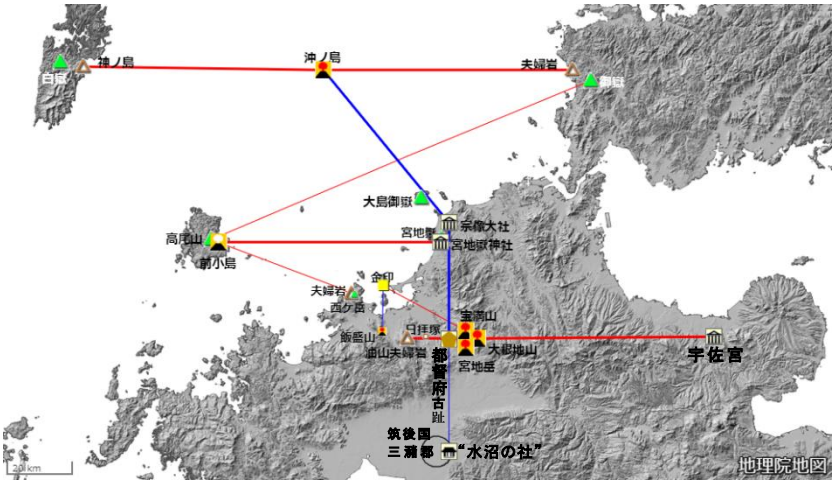
それでは、図VI.7 に宇佐宮と宗像大社を書き加えよう。だが、それは倭国で形成されてきた「太陽の道」という観念体系の完成と言えるものだから、太陽の宿る沖ノ島まで加えた図として示すのがふさわしいだろう。それが図VI.8 である。

あらためて、国土地理院地図の経度と緯度を示しておく。宗像大社の本殿は東経 130.5143 度・北緯 33.8311 度、宇佐宮は北緯 33.5234 度・東経 131.3772 度に位置する。都府楼跡の中心線上に「都督府古趾」石碑があり、それは東経 130.5152 度にある。先ほど図VI.3 で赤い円で示したところにある日菅寺は北緯 33.5172 度にある。そこが大根地山―油山夫婦岩の東西線よりも少し南にあることはすでに述べた。大根地山の緯度を調べると、三角点の位置は 33.5195 度である。前著[1]で議論したが、宗像大社の位置は、改修のせいか位置がわずかに変化した。以前の地理院地図に描かれていた宗像大社の位置は東経 130.5129 度だった。差異の大きいこちらの値を用いても、都府楼跡から北へ山の中を 34.8km 進んで東西方向のぶれは 210m（角度にして誤差は 0.38 度）を超えない。大根地山から宇佐宮へ東に山中を 71.4km 進んで南北のぶれ

は約 450m にすぎない（角度にして誤差は 0.37 度より小さい）。

これが驚くべき精度であることは、読者が実際に測量しようと考えたら判る。図Ⅵ.8 が示す山中に分け入って古代人はどのようにして真北と真東を求めたのだろうか。本書はすでに、細石神社が飯盛神社の真西に位置するようにするのに古代人がどうしたかを想像した。そのときは一度だけ見通しのよい尾根に登って照準を合わせただろうと考えたが、図Ⅵ.8 が示す山中に入ればその測量を何度もくりかえす必要があっただろう。それでも上に見るような精度で位置決めを行なったのである。よほど練習して測量に臨んだのだろう。水谷慶一の著書[3]が実際にトランシーバーで通信して短い距離を測量したときのことを書いているが、古代人はその誤差と遜色ない結果を得たのである。

宇佐宮は大根地山の真東に、宗像大社は都府楼跡の真北に建てられたという結論に導かれる。つまり、図Ⅵ.8 が示すのは公式に制定された「太陽の道」だということである。前節の仮説は承認された。



図Ⅵ.8 古墳時代後期の倭国の太陽の道

図VI.8 を解説しよう。すでに第Ⅰ章第iii節で触れたように、『日本書紀』「神代上」が一書を引いて、「日神は、自分の生んだ三女神を宇佐に降(くだ)して居らせたが、今は海の北の道の中に在る。筑紫の水沼(みぬま)の君らが祭る神もこれである」と書く。一書ではなく本文が、「三女神を、筑紫胸肩(むなかた)君らが祭るところの神がこれだ」と書くから、海の北の道の中というのは沖ノ島のことで、沖ノ島を祭る神社である宗像大社に今はいる、という意味である。日神とスサノオの誓約で三女神ほかが生まれたことを語る本文と一書は、神話の説話の一つを語りながら、「日神の娘である三女神が九州の三つの神社で祀られている」という書きつけた時代の情報まで知らせている（後代の付加である）。図VI.8 の「太陽の道」は、その神話の形成・記録とそれに対応する神社の創建を跡づけているのである。

前著[1]では筑紫の水沼(みぬま)の君らも祀っているということばを軽く受けとめていたが、今回水沼の正確な位置を探索して新しいことが判った。筑紫の水沼とは筑後国三瀦(みずま)郡のことである。現在の久留米市・筑後市・八女市には多くの前方後円墳があり、古墳時代に大きな勢力があったことがうかがえる。三女神を祀る神社は現存しないが、水沼という地名はそこが元は湿地帯であったことを示唆する。Google map で三瀦郡でも広川と山ノ井川あたりの最も水路の張り巡らされた地域で、宗像大社と同じ経度のところを選んで、仮に図VI.8 に“水沼の社”と書き入れた。あとですぐ近くに玉垂命(たまたれみこと)神社というこの地域で重要な神を祭神とする神社があることを知ったが（高良大社など玉垂命を祀る神社は多いがみな接頭語がつく。接頭語なしの玉垂命を祀るのはこの神社だけ）。この場所でなくても、黒い円で囲んだあたりが三瀦郡だから、水沼の君が三女神を祀った神社は北にある都府楼跡の場所（を越えて遠く宗像大社と沖ノ島）を遥拝したと言うことができる。宇佐宮と宗像大社が真東と真北から指し示しているのに、南から指し示す水沼の神社を加えれば、都府楼跡が特別の場所であったことがいよいよはっきりする。

三つの神社をこういう地理的配置にした「太陽の道」の主宰者がどこにいたかは明らかだろう。宇佐宮と宗像大社が指し示している焦点“都府”に王と王家の娘の巫女がいた、と考えてよい。それでも、現行の日本古代史のパラダイムを信奉する考古学者や歴史家は、奈良盆地にいる王が、自分の地元に太陽崇拝のそのような大きな神殿をつくることもせず、遠い九州に図Ⅵ.8 が示す壮大な規模の「太陽の道」を制定したと主張するだろうか。

以前、宗像大社についての番組で考古学者が、大和朝廷が朝鮮半島と交通するようになった古墳時代、関門海峡から朝鮮半島をめざす海北道中にある沖ノ島を崇拝して宗像に神社を建てたのだろう、というような話をしていた。しかし、船が大きくなった江戸時代でも（最近韓国で復元された朝鮮通信使の船は全長 34m・149 トン・乗員 72 人）、朝鮮通信使は、朝鮮半島と関門海峡のあいだを直行したのではなく、行き帰りに対馬・壱岐・博多湾沖・相島（あいのしま）と陸に近い安全なルートを航海した。「海の北」という語の視点は、その海を北に見ている土地にある。現在、この海を「海と灘」を含んで「玄海灘（げんかいなだ）」と畳語で呼んでいるが、本来「玄海」という漢語だったと考えられる。漢字「玄」は北という意味を帯びている。玄海と名づけた人は、その海を北に見て言ったのである。

図Ⅵ.8 についてもう少し言っておこう。宗像大社を北方に造営するという計画に、飯盛山と金印出土地が南北に並ぶことがヒントになったのかもしれない。そこに神殿を建てる目的は、王の宮を日神の宿る沖ノ島と結びつけることにあった。方角にこだわりを見せて、“都府”の真北で、かつ、沖合の大島と沖ノ島が直線上に並ぶような地点に神殿が建てられた、と思われる。大島は沖ノ島から最も近い島で、そこの山から沖ノ島を眺めることができる。その山に御嶽という名がつけられた。しかし、宗像大社と大島とから沖ノ島に太陽が宿るように見える日は一年をとおしてない。そのことを知らずに、「宗像大社は神宿る沖ノ島

を祭るために建てられた」と単純に考えるのは見当ちがいである。宗像大社は単独では太陽の宿る沖ノ島を拝む特別の場所にはなれないのだ。“都府”にある王の宮から真北のその場所に宗像大社を建設したのは、その神殿を経由して沖ノ島を遥拝できるようにすることが目的だった。王は、宇佐宮―大根地山―油山夫婦岩を結ぶ「太陽の道」上にある宮で、背後に沖ノ島を通る「太陽の道」を負って南面し、太陽神の子孫として権威を誇ることができるようにしたのである。

『日本書紀』「神代上」の一書は、日神が、三女神を筑紫に降ろして、汝ら三神は道中に降り居(おりい)て、「天孫を奉助して天孫を祭る所と為せ」と言ったと書く。このことば「奉助天孫而爲天孫所祭」が「神勅」として現在の宗像大社に掲げられている。もちろん「神代上」もその説話も人の為したことである。神勅とされる語句は、宗像大社を創建した王かその臣下が文字にしたものと推測できる。語句が漢文であることが、その語句がつくられた時代を示唆している。

ところがその語句は、本当の祭神は三女神ではなく天孫ニニギであることを教える。そして、沖ノ島の神は元来そこに宿る太陽神のはずである。「神代上」の語り方からして、三女神は日神と地上に降りたその孫ニニギを奉じる巫女だと考えるのが順当である。

宗像大社は沖ノ島と関連づけるために建てられた神殿だが、宇佐宮は陸の太陽の道のシンボルとなる重要な神殿である。だから、「一書」は三女神は最初そこに降りたと語るのである。実際に宇佐宮が最初の大きな神殿として創建されたと考えられる。それは、“都府”にいた王の政権の画期をなすような時代だったのだろう。宇佐宮本殿は、福岡都市圏の海(わたつみ)神社や住吉神社のように三つの社殿をもち、それが連結された独自の様式をもつ。現在の祭神は三女神に加えて応神王とその母神功皇后とされ、三女神は真ん中の棟に窮屈にいっしょにいる。あとの章で議論するが、元来の祭神は応神王とその母神功皇后ではなかった

と考えるべきである。宇佐宮に祀られていた神は、のちにそちらへ移転した宗像大社の神と同じだったはずだから、元来の神は日神とその孫ニニギだったと推定される。宇佐宮は太陽の道の神殿なのだから、日神が祀られることは必須である。ところが、第Ⅰ章で見たように、九州北部の神社は三つの社殿をもちそこに三柱（みはしら）の神を祀るのが慣例であった。神殿を建てた王は、日神を祖先神とし、高天原から天降ったニニギの子孫と称するのだから、もう一人の神はニニギということになる。だが、上で考えたように三女神が神に斎（いつき）まつる巫女だったとすれば、三つの社殿にはもう一人の神が祀られていたはずである。それが誰かはあとの章で考えよう。

ところで、宇佐宮について『日本書紀』を検索しても、600年代の推古王以前に宇佐という地名は出ない。摂政神功皇后と応神王の巻にも出ない。宇佐宮のことは奈良盆地で伝承になるほど知られていなかった、ということである。宗像大社についても、「胸形の大神」ということばが応神王の巻に、「胸方の神」ということばが雄略王の巻に出るだけである。それは、「神代上」の「胸肩の君」と同様に後代の地理の知識が付加されたものと考えられる。宇佐宮と宗像大社の創建が一言も語られないことは、奈良盆地の王がかかわっていなかったことを示しているだろう。

われわれは、宇佐宮と宗像大社の二つの神殿を創建して領域的に大きなスケールとなった「太陽の道」は、祭政一致の理念を体現して格段に進歩した領域国家を表現している、と考えることができる。古墳時代に倭国はそのような領域国家に発展したというのが、本書の見方である。以下、この見方を支持する事象を挙げていこう。

本書の冒頭で、壱岐の前小島が宮地嶽神社の真西にあり、沖ノ島に準じるような特別な島だと知って本書の思索が始まったことを述べた。

簡単にそのことを議論しておこう。すでに触れたように、宮地嶽神社の場所は西南西にある相島に沈む素朴な太陽の道を拝むのに適している。しかし宮地嶽神社は、日本一の大しめ縄を誇る大きな神社で、古くから近くにある宗像大社に引けをとらないほど参拝者の多い神社だったと思われる。それは神社の由来にかかわるとわたしは考える。神社は標高 180m の宮地嶽頂上から南南西の標高 35m のところにあるが、神社の東北東 200m の標高 55m の山腹に宮地嶽古墳がある。

古墳の概要を Wikipedia から要約すると次のようである。径約 35m の円墳で、全国第 2 位の規模の巨大石室（石室全長 23m・石槨（せっかく）長さ 3.5m×幅 1.7m・玄室長さ 11.7m×幅 2.5-2.8m×高さ 2.2-3.1m）をもつ。国宝に指定された副葬品は、金銅装頭椎大刀 1（推定全長 2.4-2.8m）・金銅装頭椎大刀 1（推定全長 0.9m）・金銅製鞍 1・金銅製壺鐙 2・金銅製鏡板付轡 2・金銅製杏葉 2・鞍（唐草文金具）1・鉸具（鉄製）1・鉸具（金銅製鞍金具など）7・ガラス板 3 個体・ガラス板（破片）19・金銅製透彫冠 1・金環 3・銅鈴 3・砥石 1 ほか。高い格式の古墳であることが分かる。

この宮地嶽古墳を説明するのに、Wikipedia は、被葬者は宗像地域の古代氏族である胸肩君（きみ）と推定され、具体的には宗像徳善とする説が挙げられる、と言う。そして宗像氏について、伝承によれば、海洋豪族として、宗像地方と響灘西部から玄界灘全域に至る広大な海域を支配したとされる、とする。推定はもっぱら『日本書紀』の断片的な記述に基づき、伝承というのも神社での言い伝えと思われる。だが、胸肩君ということばは「神代上」に出るだけである（天武王の妃に宗像徳善の娘があり長子が高市王子だったことが『日本書紀』に書かれている。「神代上」に胸肩の神を祀る胸肩君ということばが出るのは、『日本書紀』編修時の付加と考えられる）。「天武紀」のこの記事以前には、「胸形の大神」と「胸方の神」という神について言及するだけだということもすでに触れた。宗像氏が古墳時代から宗像地域の有力者だったという見方は、『日本書紀』のわずかな断片に依拠しているのである。

宮地嶽古墳と宮地嶽神社についてもっと慎重な考察が必要である。先に挙げた考古学者はそう言うけれども、宗像氏が古墳時代に海洋豪族として玄界全域にわたる広大な海域を支配したという見方には、信頼できる根拠はないのである（古くから名が出る代表的海人で全国に展開した阿曇（あずみ）氏との関係はどうなるだろう?）。もし、その地方の豪族が宗像に神社を建てたとするなら、どうしてさらにもう一つ宮地嶽に大きな神社を建てる必要があったのだろうか。それでは、自分たちの宗像の神社に対する崇拝を弱め、信者を分散させることにならないか。

図VI.8 の、体系化された「太陽の道」のシンボルとしてある宇佐宮と宗像大社は、流布している上のような見方に反対する。二つの神殿は、真東からと真北から指し示す太陽の道の焦点にいる王が建設したということを表現している。宗像大社の宗像氏と宇佐宮の大神氏とは神殿を守護する神官と見るべきである。その両氏がのちの時代まで続く豪族になったのは、二つの神殿が祭政一致の倭国の国家的な施設であり、その管理に大きな経済的な支出がなされたからだと理解することができる。

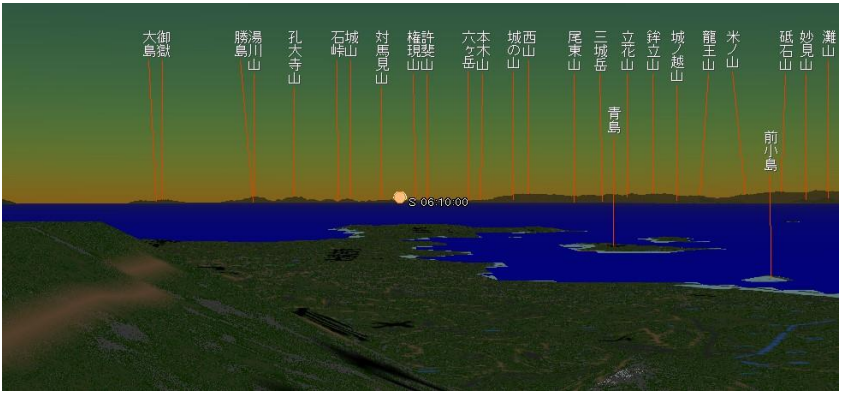
そもそも宮地嶽という名は、長門二見夫婦岩近くの御嶽と類似表現で、「太陽の道」崇拝に関係している。宮地嶽神社は、宗像大社が建てられて崇拝を集めるようになったあとに、昔から地先の相島への日の入りを拝む霊所と見なされていた場所に、新たな意味を体現して建てられた、とわたしは推測する。そばにある宮地嶽古墳と無関係とは考えられない。上で見た国宝級の副葬品が、それが一地方の豪族の墓だという見方に異議を唱える。その円墳と宮地嶽神社をセットと見て鳥居も加えれば、一つの大きな墓域となる。先に、熊野神社の境内を熊野神社古墳と一体の墓域と見なすアイディアをほのめかしたが、こちらの宮地嶽古墳と宮地嶽神社はさらに大きな規模の墳丘墓と見なすことができる。

この規模の大きな造営は、造営費用の多額さを考えても、宗像大社真南の“都府”にいる王家の事業だったと考えるのが順当だろう。この見方だと、宮地嶽古墳の被葬者は王家の誰かということになる。石室の大きさと副葬品の豪華さがこの見方を支持する。被葬者が大根地山から昇る春分秋分の日の出を拝むことを願った日拝塚古墳よりもあとの、古墳時代晩期の古墳と想定することができるだろう。

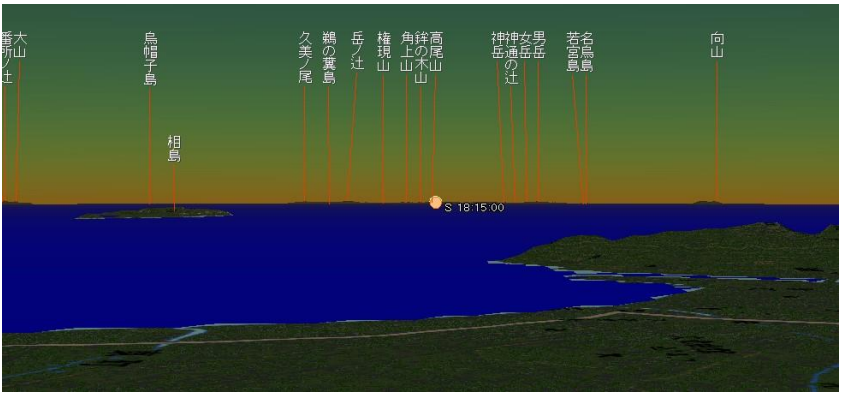
このように考えてくると、宮地嶽古墳と宮地嶽神社は、太陽の道を崇拝する心性が生み出したものということになるだろう。古墳と神社は弥生時代以来の太陽の道の要件を満たしているのではないか、つまり、ここに太陽の道が通っているのではないか。本書冒頭で述べたことがこの問いへの答えとなる。宮地嶽神社と壱岐前小島を結ぶ東西線が、長門二見夫婦岩と沖ノ島を結ぶ太陽の道と同質のものと見立てれば、宮地嶽ふもとの古墳と神社は、壱岐前小島に沈む春分秋分の日の入りを拝む霊所ということになる。宮地嶽古墳の被葬者は古来の王たちのように太陽の沈む神聖な壱岐前小島を礼拝できるのだ。先に、宮地嶽神社境内に立つ鳥居から石段を下りると、参道が砂浜の海岸にある一の鳥居まで続き、その道が春と秋の特定の日に“光の道”を演出することに触れた。お汐井（しおい）を採るためのその道は西南西の方向へ向かうが、宮地嶽神社の本殿は真西に向いている。この神社自体はむしろ春分秋分の入り日の方角に向いているのである。

それでは、カシミール 3D の画像を図VI.9 に示して、そのことを確認しよう。この画像は、春分秋分の日に、壱岐前小島の西北西 2.2km にある標高 141m の高尾山にカメラを置いて得られるものである。前小島から宮地嶽神社まで 69km あるから、宮地嶽の見分けがつかず、近くにある対馬見山がわずかに見えてその南から春分秋分の太陽が昇るのが分かるだけだ。こんどは、宮地嶽から春分秋分の日にカメラを真西に向けて得られる画像を、図VI.10 に示そう。壱岐には高い山がないから、山々

の形はよく見分けられない。図VI.9 と図VI.10 は、宮地嶽神社と壱岐前小島とが東西線上にあると知るのが困難なことを教える。しかし船乗りは、海上を動くとき陸地の山々の形が変化していくのを見て目的の土地がどの方向にあるかを知るのである。熟練した船乗りたちの知識が積み重なり伝えられれば、長いあいだには宮地嶽と壱岐前小島がおおよそ東西にあると知られたと考えてよいだろう。



図VI.9　壱岐前小島西の高尾山から見る春分秋分の日の出



図VI.10　宮地嶽から見る春分秋分の日の入り

壱岐前小島が特別の島と考えられたのは、最初に言ったように、前小島へ向かう浅瀬があることによる。満潮のときは海面に立つ鳥居へ干潮時に現われる浅瀬を通って渡ることができる。実は、沖ノ島を通る太陽の道の西の標識である神ノ島にも同様の浅瀬がある。前小島の浅瀬は東西方向を向いていないが、神ノ島へ伸びる浅瀬は対馬本島の陸地からほぼ東へ神ノ島に続いている。この話ができるのは、地理院地図に両方の浅瀬が描かれているからである（琉球の斎場御嶽の東の海岸にある夫婦岩にも浅瀬を渡っていけそうだ）。鰯の頭も信心からという、このちょっとした符合が古代人の心性に訴えるものがあったのだろう。壱岐前小島は沖ノ島に準じる神の島と見立てられることになった、そして、沖ノ島の神はそこに宿る太陽神と考えられたので、前小島にいる神は日の神の弟のスサノヲとされた、と解釈できる。

この見立てを採り入れれば、宮地嶽神社は前小島へ至る「太陽の道」上にあることになり、そこの古墳の被葬者を満足させることができる。本書は、このような解釈をして、図VI.8 の太陽の道の体系に、宮地嶽神社―壱岐前小島を結ぶ東西線を「準太陽の道」として書き加えている。

iii．倭の五王の時代

前節 i と ii で観念的だが物的証拠をともなう「太陽の道」から古墳時代を考察したが、古墳時代の太陽の道を主宰する王は弥生時代の邪馬壹国の継承者だろうという考えを含むものであった。この第iii節では、その考え方が妥当かどうかを文献資料で検証しよう。

古墳時代はいわゆる「倭の五王」の時代を含む時代である。すなわち、421 年～478 年のあいだ倭の五人の王が中国南朝の宋に使節を送っていた。ところが、『日本書紀』は「倭の五王」に該当するような記述をもたない。かなり文明化された 400 年代、五人の王が継続的に宋に使節を送り、高句麗や百済などと競うように認められることを願った王号とそのほかの地位を授かったのに、古くから天の下を支配したと主

張する王権の史書にそのことが記されていない。それよりもずっと古い時代の伝承を記述するのに、近い時代の栄誉と見なせることを『日本書紀』は書かない。伝承がなかったとでも言うのだろうか。このことに大きな疑問符をつけなければいけないのに、歴史学者はそれを問題にしない。『日本書紀』が書けない理由は、本書が倭国史を再構築しその論証が承認されたあかつきにははっきりするだろう。

それまでは、五人の王のことを記す国内資料が残されていないので、古墳時代についても、倭国の歴史を研究するには倭人のことを記載する中国の歴史書から始めるのが正攻法である。魏の時代の倭国のことを書いた『三国志』「魏書」に続く中国史書を、順番に丁寧に読解していこう。ただし、朝鮮半島の文字資料にも「倭」のことが書かれているから、それも参照することが必要である。

魏の次の王朝は晋で、晋の時代の歴史は『晋書』に書かれている。ただし晋は 313 年に北方民族の匈奴に倒され、晋の皇帝の一族が 317 年に華南に再興した晋はそれ以前と区別するために「東晋」とよばれるが、『晋書』はその東晋まで含んで 420 年ころまで記述する。このことにつけ足しておくことがある。313 年に晋が倒されると、高句麗が機敏に楽浪郡（平城あたり）を占領し、帯方郡も崩壊した。朝鮮半島の情勢は一気に流動化したのである。朝鮮半島南半の馬韓・辰韓は統合化に進み、百済と新羅という国家が形成される。この情勢は、朝鮮半島南岸に倭地をもっていた倭国も巻き込まずにはおかない。日本列島の古墳時代はこういう極東アジアの地政学的な流動化のなかにあった。

『晋書』は 200 年以上もあとの北朝の唐代(648 年)に完成したので、「東夷伝」に載せる資料は少なかったのだろう、倭人の記述は短くほとんど『三国志』の簡単な要約でしかない。倭国についての情報は、本紀の「武帝紀第三」の書く、前年魏からの禅譲によって新王朝を建てた翌年 266 年の 11 月に「倭人が来て方物を献じた」と、「安帝紀」の書く、

東晋の終末期の 413 年に「高句麗・倭国および西南夷が方物を献じた」の二つしかない。266 年の遣使は、晋の初代の皇帝位就任を祝うためと考えられ、邪馬壹国の女王壹与から年月が経っていないから、邪馬壹国が代表する倭国からのものと考えてよいだろう。しかし、二つの遣使の情報だけでは倭国の内情は分からない。

そこで、朝鮮半島の資料を見てみよう。残っている歴史書は 1100 年代に編纂された『三国史記』で、倭についての記述は多くはない。そのなかでも、新羅のことを記した「新羅本紀」の分量が多いのは、三国を統一した新羅で書かれた資料が多く残っていたからであろう。AD 0 年代から倭との戦いと講和を交えた関係があったことが記されている。200 年代前半に倭人が 4 度攻め寄せたことが記されているが、これは『三国志』の書く卑弥呼のころのことである（「新羅本紀」173 年の条に卑弥乎の名が出るが、年月がかけ離れすぎ）。『三国志』のいう「一大率」がどのような軍事行動をしたかを示しているだろう。

287 年から 500 年まで、28 度の倭の記事があるが、倭の攻勢を物語る。新羅の都である金城(月城)に 4 度攻め寄せ何日か包囲したことが書かれているから、倭国は新羅の都まで攻める本格的な攻撃もしたのだ。他方で、通交し、婚姻や人質を送ったことが語られる。400 年前後の戦いは、次に見る高句麗との戦争と関連しているだろう。500 年のあとは白村江の戦いまで倭の記事は現われないから、倭国の朝鮮半島での軍事的な活動はおさまっていったように見える。つまり、新羅はしだいに領国を安定的に支配するようになり、倭国の攻勢も結局成果を挙げることなく終わった、ということだろう。

「百済本紀」は 397 年から 428 年まで倭について 6 回書いている。これらの記事は倭と高句麗の戦争の時代に当たる。百済から人質が倭に送られているが、百済は、倭となるべく争わず高句麗に対応しようとした、と考えられる。百済と倭の温和な関係が、倭がのちの白村江の戦

いへ援軍を送ることにつながった、と思われる。

新羅と百済に対する倭の対応が異なるのには何かほかの要因があったのだろうか。「新羅本紀」の AD57 年ころの記事は、新羅の 4 代目の王となった脱解尼師今が、倭国の東北一千里の多婆那国に生まれたと書く。千里は第Ⅴ章で論証したように 70km 余りだから、この人は倭人だったということだろう。Wikipedia によれば夫人が新羅 2 代目の娘だというから、婿が首長の家を継いだことになる。「新羅本紀」は倭との交渉の深さを記しているが、この記事も、新羅人と倭人のつながりが深かったことを示唆している。

もう一つ、高句麗の第 19 代「好太王」の業績を称えた石碑が、倭との戦争のことを記している。391 年倭が百済や新羅を従属させるような事態（上で見た『三国史記』の記述が真相だろう）になったので、400 年、百済・新羅方面へ軍事行動を起こした。倭軍が退却したので追って任那・加羅まで迫ったが、安羅の軍が新羅の王都を落とした、と書かれている。朝鮮半島南岸の任那・加羅・安羅は倭国側について戦ったものと思われる。この戦争は、高句麗が南部を征服することなく収束したのだろう。「好太王碑」は、404 年にも領土である旧帯方郡地方に倭が侵入したのを大敗させた、と書く。『晋書』が 413 年に倭が高句麗と並んで東晋に方物を献じたと書く記事は、倭が高句麗と競おうとするようすを報告しているのである。

以上のことは、卑弥呼の時代の 200 年代中期から 400 年代初頭まで、倭国の主要な事業は朝鮮半島への対外進出だったということを明かす。領地か貢ぎ物の獲得が目的だっただろう。新羅の都を包囲するには相当の軍隊を派遣したと思われるし、強国高句麗との戦争はさらに大きな戦争だったはずだ。多大の戦費を必要としただろう。たとえば応神王が、奈良盆地で首長権を継承していた王家から王位を奪い取った争いよりもはるかに大規模だっただろう。

Webを探すと、学習院大学東洋文化研究所のホームページに、「好太王碑」近くの太王陵（太王陵という銘文のある磚（かわら）が出土）のことが載っていた。墓の規模は一辺65m×高さ14m、金製品・鉄器・鉄の鎧片も多く発見されたという。高句麗の隆盛をもたらした広開土王の墳墓が日本の“応神王の前方後円墳”とくらべてそれほど大きくないことは、日本古代史を考えるとき考慮されるべきだと思う。

さて、また中国史書にもどって、東晋の次の宋の時代を記述した『宋書』「列伝東夷」を調べよう。倭国と比較するために、高句麗国と百済国のことも見ておく。『晋書』本紀に出る413年の高句麗と倭国の遣使に関連して『宋書』列伝では、このとき高句麗が白馬を献上した(註)ので、その王を「使持節、都督営州諸軍事、征東将軍、高句麗王、楽浪公」に為したと書く（そのころ、次に宋を建てる劉裕が東晋の実権を握っていた）。続いて、420年禅譲させて劉裕が宋の皇帝に即位すると、詔で高句麗王の以前の称号を追認し、別の称号を追加している。459年には、高句麗王の位は上がって「開府儀同三司」になった。中華帝国公認の行政機関「府」を開設する権限が授けられたのである。つまり、その王宮に「都督府」と書いた扁額を掲げることができるようになった。

百済国の記述の先頭には、「もと高句麗とともに遼東の東千余里にあった」と記される。この文は、『三国志』と『後漢書』の「夫余国」の記述をなぞっているように見える。けれども『宋書』は、それを過去のこととし、昔の夫余の宋時代の後継国と見なす百済のことを書こうとしている。すでに論じたように、『宋書』の編者沈約は宋・斉・梁と三つの王朝に仕えた人で、ここでも「千余里」と書くとき違和感を覚えなかったということである。416年には百済王も「使持節、都督百済諸軍事、鎮東将軍、百済王」の位を授与され、劉裕が宋の皇帝に即位すると、「鎮東大将軍」の号を追加された。このとき、倭王はまだ同格の称号をもらっていない。

註：細かいことだが、中国北半には異民族の王朝が建てた国があったので、白馬を献上した高句麗も百済もそして倭国も、使節は船で東シナ海を渡り長江河口まで行ったのである。

編者沈約は見識のある人だったのだろう、『宋書』は、『後漢書』とちがって、『三国志』「東夷伝」の記述をなぞったりしない。倭国についても、宋の時代のこととして、「高麗(こうらい)の東南大海中にあり、世々貢(みつぎ)を修(おさ)める」と書く。すでに楽浪郡や帯方郡はなく、当時そこにあったのは高句麗つまり高麗だったから、高麗の東南と書いたのだ。劉裕が即位した翌年421年、おそらく祝意を伝えに来たのだろう倭王讃の使節に、「倭讃万里を修む、除授(位)を賜うべし」という詔(みことのり)を出した。この語句は「遠く万里を越えてきた」とねぎらいのニュアンスを帯びているが、詔書の起草者におざなりな書き方は許されない。起草者は倭王の使節が東シナ海を渡って来ることを知った上で、概数で1万里なら大きく間違ってはいないだろうと考えてそう書いた、と考えなければならない（高句麗や百済など地理のよく知られた所からも東シナ海を越えて来たのだから）。1里≈400mだとすると、博多湾から長江河口どころではなくはるかに先のマレー半島まで行ってしまい、詔書の起草者は職を失う。

讃が死ぬと弟の珍が王になって貢献し、「使持節、都督 倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓・六国諸軍事、安東大將軍、倭国王」と自称して、叙任してほしいと上奏した。しかし、詔は「安東将軍、倭国王」だけを承認した。ただ、使節団の倭隋以下13人は将軍号が認められている。次の倭王済が「<u>使持節、都督</u> 倭 新羅 任那 加羅 秦韓 慕韓 六国諸軍事，安東将軍」の位をさずかった。ここで百済への軍事的な権限が認められていないことに注意が必要である。むしろ、倭はやっと百済と同格になったのである。済のあと世子(跡継ぎ)の興が授かった位は、「安東将軍、倭国王」である。次に弟の武が王となり、478年に使いを送り、上表文を奉った。その文章は、この時代の倭国のことを知るのに重要だ

から、要約して引用しよう。

封国は偏遠にして、藩を外に作(な)す、昔から先祖が甲冑に身をつつみ、山川を渡り歩き、東は毛人を征服すること五十五国、西は衆夷を服属させること六十六国、海北に渡って平らげること九十五国、…、高句麗の無道…、……義憤を示すなど…。(文のしめくくり) ひそかに自ら「開府儀同三司」およびほかの称号をとなえ、忠節に勤めております。

この上表文に対し詔書は、「使持節、都督 倭 新羅 任那 加羅 秦韓 慕韓 六国諸軍事、安東大将軍、倭王」を授けただけで、「都督府」を開設することのできる位「開府儀同三司」は認めなかった。

上表文は中国語を母語とする人が書いたのだろう、皇帝に対しへりくだった語句で始まる。封国とは皇帝から分け与えられた領地を意味し、藩は皇帝を守護する垣根の意味で、「授かったこの国はひとえに遠方にあり、皇帝の支配地を守る垣を外に作ろうとするものです」と表明しているのである。うしろの「衆夷…」はそれを受けて、まわりの夷人とへりくだっている。下線を引いた文は、「東の毛深い者たちの 55 の国を征服し、西の夷人の 66 の国を服属させ、海の北に渡って 95 の国を平らげた」といった意味である。「海北」という語のことは宗像大社のところですでに述べた。この語の話者はその海の南にいるのである。だから、海の北へ渡ったところが朝鮮半島であることを表現できる。そこを 95 国と表現するのは誇張である。だが、「六国諸軍事」の権限を認定してもらった倭王は、百済を除く新羅まで含む領域が支配下にあると言いたいのである。この表現は、上で見た『三国史記』に書かれている倭国の朝鮮半島での活動を大言壮語しているのだ。

他方の東の国々を征服し西の国々を服属させたとする文章は、支配の強度が問題だが、倭王の立場から、列島内での倭国の膨張の過程を表現している、と解釈できる。こちらの方が、昔から奈良盆地の王が天下

を支配したと主張する『日本書紀』よりも現実の歴史のあり方を示している。その内実を探求するのが歴史家の課題だ、と門外漢は思う。ここまでの考察に従えば、この時代の倭国は邪馬壹国の後継国だと見なせる。「海の北」という表現もその考え方にふさわしい。そう考えると、東の国々に大阪平野や奈良盆地が含まれるかが問われなければならない。伝承からするとかなり強大な地域だった出雲は、いわゆるズーズー弁が残っていたから“毛人”の国に当たると考えることができ、倭国に従属するようになったのがいつかということが問題となる。

現行の日本古代史パラダイムを信奉する歴史家のように、この上表文を書いた倭王は奈良盆地にいたとするなら、東の毛人の国々に近畿地方よりも東の関東地方まで含めなければならないだろう。その考えだと、あれほどしばしば朝鮮半島へ出撃した軍隊の主要部隊は大阪湾から出たとしなければならない。弥生時代には近畿地方は九州島よりもまだ後進の状態にあったと思われるのに、古墳時代になると急速に、500km 以上離れた朝鮮半島へ軍事行動を起こすのに必要な人的・経済的な負担を担うほど発展したのかが問われなければならない。

大局的に 400 年代の極東を考えてみよう。朝鮮半島で高句麗が強大だったけれども、朝鮮半島南半では、一足先に国家と言える体制になった百済や、遅れてほぼ国家の形態に達した新羅はもちろん、小国だけれども弁韓の国々もまだ自立的に行動し、全体としては分立の状態だった。それなのに、中国大陸の先進文明圏から海を隔てて最も遠い日本列島では朝鮮半島よりも一段早く統合に進み、九州島から関東地方までがおおよそ一体的な政権のもとにあったと想定すると、『日本書紀』の誇大な主張と同じ考え方に陥ってしまう。

古墳時代の倭国の中心部が九州島にあったと考えれば、日本列島の国家体制の形成について、世界と極東アジアでの現実の歴史で観察さ

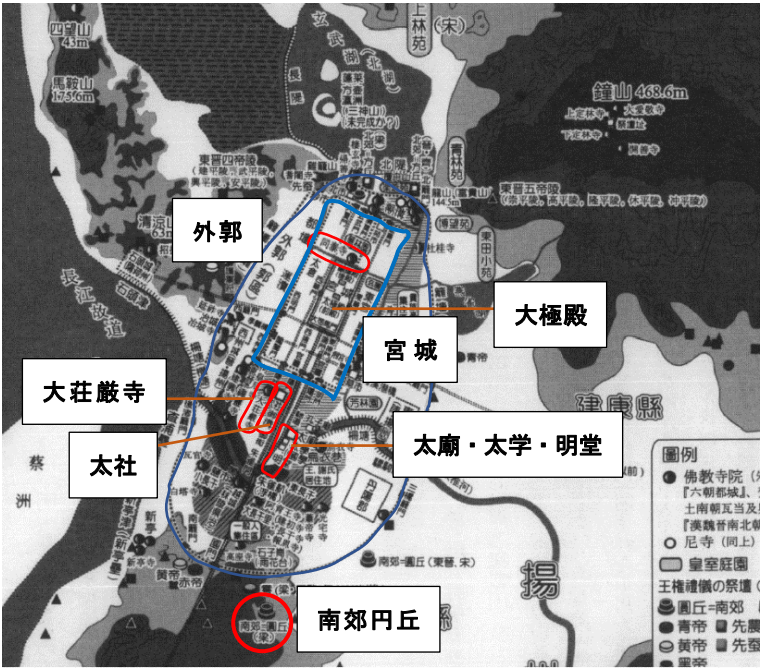
れるような段階的な発展として捉えることができる。

この観点からすれば、二つの大きな神殿宇佐宮と宗像大社の創建は、後世の琉球王朝の「太陽の道」制定と同じく、九州島でのスケールの大きな「太陽の道」の制定であり、倭国が本格的な領域国家の体制を確立したと言うことができるだろう。この段階で、祭政一致の制度的な政治体制への歩みが始まった、と見なすことができる。

400 年代、末期の東晋への遣使に続いて五人の王が継続して宋に使節を派遣したことは、倭国の歴史に大きな影響を与えたにちがいない。魏使が来た 200 年代中ごろから年月が経ち、倭人の社会は相当に発展したと考えられる。たとえば稲とともに伝来した入れ墨の風習などはすたれ、倭の使節たちは中国風の衣服を用意して、東シナ海を大きな船で渡ったと想像してよいだろう。歴代南朝の都は東晋の再興以来長江をさかのぼったところにある建康(今の南京)である。船は建康まで入って行っただろうか。使節団一行は中華帝国の首都で官僚に対面し、宮城でおそらく皇帝も会ってくれただろう。規模の大きな都城を見物し、めずらしい品物を買い込み…、将軍号までもらった。多くのことを学んだことだろう。

建康は、三国の呉のころから名高い戦略的な要衝であった。その王都プランがここで注目したいことである。論文[45]で考察された梁の時代の建康推測図を引用させてもらい（添え書きに「梁を中心として」とあるから、ほぼ梁の時代の都城図なのだろう）、図VI.11 に示そう。入りくんだ水路と山が天然の要害となっている代わりに、後漢・魏・晋の都の洛陽と同様な南北・東西方向を軸とする都城を築くのに適さなかった。宮城のある内郭だけが条坊で区画されたが主軸は傾いている。われわれの関心は、宮城の南正門のすぐ外の西側に太社と寺院があり、道をはさんでおおよそ東側に太廟・太学・明堂が並んでいること、そして、外郭の外の南郊に天に祈る円丘(のちの天壇)が置かれていることであ

る。元の都の洛陽でこれらの施設は基本的に同じ配置で置かれ、493 年に洛陽に遷都した北朝の北魏もその慣例を踏襲した。それらは、中華帝国にとって政治や祭祀や教育についての基本思想を体現する重要な施設であり、国家の重要な儀礼などがみなそこで行なわれた。宮廷の外国使節応接の役人が、東夷の倭の使節たちをそこに案内することは大いにありうることである。身近に感じて倭人が最も興味をいだいたのは、祭祀の施設である太社・太廟・南郊の円丘だった、と思われる。



図Ⅵ.11　南朝建康の都城プラン（引用）

「社」とは社稷（しゃしょく）の社を意味し土地神を祀る祭壇だから、太社は帝国の土地神を祀る施設である。廟（びょう）は祖先を祀る建物で、太廟は帝国の王朝の祖先を祀る。都城の南の郊外に置かれた円丘＝天壇は、皇帝が天を

仰いで祭祀を行なう壇である。これらの考え方は東アジアの古代人の共有する思想のなかにあっただろう。しかも、施設が都城で方角まで意識して配置されていることに、説明を受けた人が図VI.7 の太陽の道を設定した国から来たのだとしたら、共鳴して聴いたはずである。

使節たちが先進の国から帰ってきて、そこでの天地に対する祭祀や皇帝の祖先の祀り方を話すのを聞いた王の宮の人たちは、中国の思想に刺激を受けて、自分たちの「太陽の道」のあり方を考えることになった。天帝の代わりに崇めている日の神の祀り方、稲の実りを祈る祭祀のやり方、祖先の祀り方などをどう改善できるか。倭国の人たちが考えて出した答えが、「太陽の道」を図VI.7 から図VI.8 に拡張整理することだった、というのが本書の考えである。

中国の思想を採り入れるのに変えられない点があった。中国で南北を主軸とするのに対し、太陽の道の主軸は東西方向だった。日神を祀る規模の大きな神殿を新たにつくることになったとき、倭人たちは、主軸の東西線を中国人もしなかったほどの規模（80km）に延ばして、国の東（さき）の宇佐を選んだ。それが、『日本書紀』の一書の語る「日神（の三人の娘）は初め宇佐に降りた」という説話である。けれども、それでは日神の宿る沖ノ島とのつながりが十分表現されていない。そこで、王の宮の真北の宗像にもう一つ神殿を建て、そこを日神の宿る沖ノ島を遥拝する場所としたのである。

補足すれば、天神地神を祀る大根地神社のさらに東（さき）にある宇佐宮は、同様に祖先(神)をまつる宗廟であり、天神地神の中心的神とする太陽神をまつる神殿であり、陸の太陽の道は土地神に対するものでもあると解釈することができる。もう一つ宗像に神殿を建ててからは、そちらが海原のかなたの沖ノ島とその上に広がる高天原にいる太陽神を祀る天壇ということになる。太宰府南方の水沼の君の祀る神社は、中国の都城の南郊にある円丘と見なすことも可能である。

このようにすれば、大根地山を霊山とする「陸の太陽の道」を沖ノ島を通る「海の太陽の道」に連結することができ、二つの神殿の指す焦点にいる王は、そこに居ながらにして二つの神殿を遥拝することができる。倭王武は開府儀同三司を承認してもらえなかったが自称した。二つの神殿を置いて図Ⅵ.8 のように壮大なスケールで太陽の道が制定されているのだとしたら、その焦点にある王の宮に「都督府」という扁額を掲げたとする想像に誘われる。筆者はそれを“都府”と呼んでいるのである。この大きな規模の太陽の道は、倭国の領国の拡大を表現してもいるのである。

こうして図Ⅵ.8 のような体系化された太陽の道が完成した、というのが本書の提出する「太陽の道」仮説である。それを断定せずにまだ仮説と呼ぶのは、証拠の乏しい古代史解釈のまぬがれない限界から超越しないためである。しかし、これ以後の章がこの仮説を支持する状況証拠をもっと追加するだろう。

中国南朝の歴史書の短い記述を敷衍して議論するのは、倭国の歴史を可能なかぎり知りたいからである。本書にしても現行の日本古代史パラダイムにしても、古墳時代の倭国に関する端的な証拠は少ない。だが、倭の五王の中国との通交が倭国の歴史に大きな影響を残しているのは確かなことだろう。中華帝国からすれば東夷や南蛮諸国は朝貢してきたということになるが、外国使節の献上物に対して数倍もの返礼品を返した。使節を送った国は、その返礼品だけでなく、有用な文物を購入してもち帰ったと考えられる。民間の交易も行なわれたと考えるべきだろう。すでに帯方郡と楽浪郡が崩壊した 300 年代初め、日本列島に逃れてきた漢人や漢語を話す人々がいてもおかしくない。400 年代の日中交流が人の行き来を増やして、最初のかなり本格的な中国文明の流入が起きただろう。本書の議論のなかで、宝満山・玄海・日拝塚などの漢語表記の例を示したが、王の宮に、漢語を使う外国人に加えて、

しだいに漢字と漢語を勉強した倭人も出ていた、と考えてよいだろう。そういうことが倭王武の上表文の紙背にあった、と言うことができる。現在も使われる漢字の「呉音」はそのころから始まったと考えることができる。

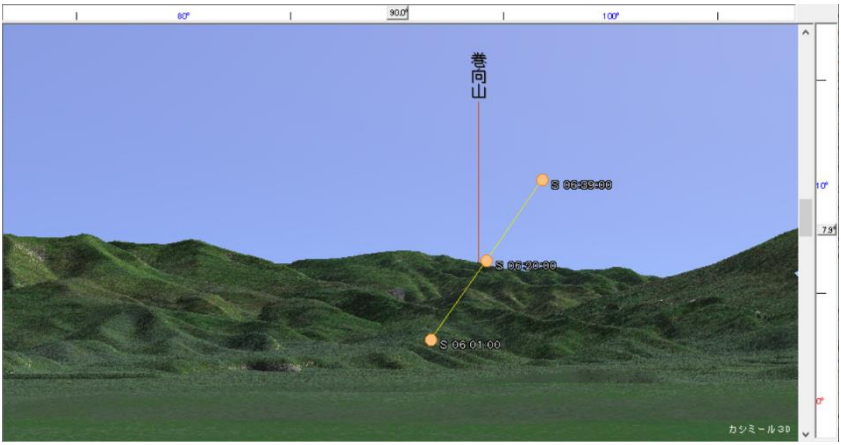
500 年前後から進んだと思われるが、中国の南朝でも北朝でも仏教が隆盛になった。列島に仏教が来た年を、『日本書紀』の記述に基づいて百済から仏像と経典がもたらされた時とする説が流布しているが、宗教の普及は経典や仏像が来ただけで進むとは思えない。布教のために海を渡ってくる僧がいたにちがいない。そのルートもシルクロードからさらに朝鮮半島経由とだけ想定してはいけない。法顕(ほっけん)はインドから東晋の末期に東南アジア経路で帰って来たし、インドから中国にやってきて梁の武帝に会った達磨(だるま)も同じ海上ルートで来た。熱意の僧が東シナ海を渡って来ただろうとわたしは想像する。そういう前史がなければ、600 年代初頭に数十人もの沙門(しゃもん)が仏教を学ぶために隋に渡ることは起きなかっただろう。

iv．古墳時代の奈良盆地

前章Ｖで、奈良盆地の弥生時代の唐古・鍵遺跡で冬至の日の出を拝もうとすれば、三輪山の頂上から昇ることを見た。当然ながらここにも太陽崇拝があったのである。前著[1]でも同じ問題を考えたけれども、そのときにはソフトウェア「カシミール 3D」を知らなかったので、考察は不十分に終わった。古墳時代にはどうなっただろうか。弥生時代後期から古墳時代初期の遺跡と考えられている纒向(まきむく)遺跡で調べてみよう。図VI.12 に、纒向遺跡の場所から東の山並みがどう見えるか、春分秋分の日の出がどこから昇るか、カシミール 3D の画像を示す。春分秋分の太陽は巻向(まきむく)山の頂上から顔を出すことが分かる。

しかし図VI.12 を見ても、巻向山が目立つ峰とは言えない。土地勘のない者には三輪山の続きのこの山がなぜ尊重されたのか理解できなか

ったが、今回丁寧に調べて分かった。三角点の置かれた標高 567m の場所から南南西 500m 余りのところにデンノダイラと呼ばれるところがあって、そこに磐座(いわくら)があるのだ。三輪山は山そのものが御神体とされているが、具象的に霊性を帯びるのは磐座だろう。その代表的なのが三輪山山塊に続く巻向山にあるのだ。

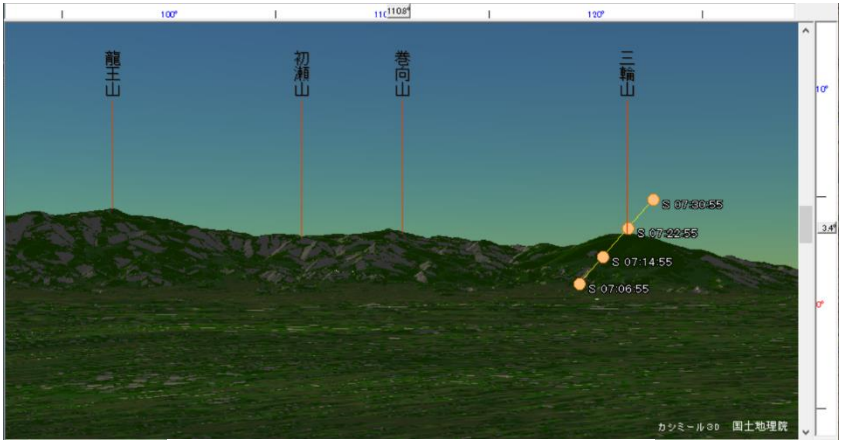


図Ⅵ.12　纏向遺跡から見る春分秋分の日の出

図Ⅵ.12 をよく見ると知られるが、この図でカメラは方位角 90 度の方角に向けられていて、そこに巻向山山塊のピークがあり纏向遺跡中心部はそこから真西にあるのだ。そして、纏向遺跡中心部は、巻向山の名をもつ尾根の緯度よりも少し北寄りにあり、春分秋分の日の出がちょうど巻向山から昇るように見える場所にあるのだ。唐古・鍵遺跡でもそうだったから、奈良盆地では太陽がちょうど標識の山の頂きから出てくるのをありがたがった、と考えられる。

この見方を支持するカシミール 3D の画像が図Ⅵ.13 である。この画像は、カメラを宮内庁が第 10 代崇神王の陵と認定する行燈山(あんどんやま)古墳の後円部に置いて得られる。行燈山古墳は、被葬者が三輪山の頂きから昇る冬至の日の出の光を浴びることのできる場所に造営されたのである。

ところが、この前方後円墳は主軸が巻向山の方向を向くように築かれている。Google map でそこから巻向山へ直線を引くと、その直線がこの古墳の主軸と一致することが確認できる（平原遺跡の方形周溝墓の場合と同じやり方である）。目立つ三輪山がこの地区で最も崇拝された霊山だが、纏向遺跡の位置と行燈山古墳の主軸は、巻向山も太陽崇拝の重要な山だった、と証言している。

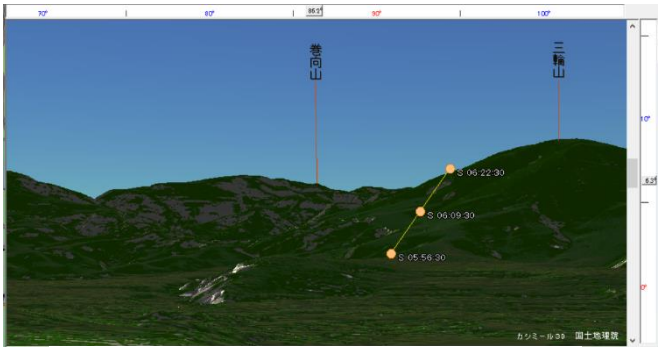


図VI.13　行燈山古墳から見る冬至の日の出

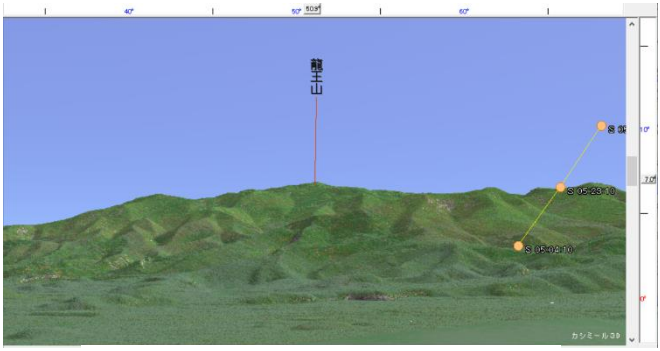
地理院地図を拡大すると行燈山古墳の等高線はそれが前方後円墳であることを教えるが、その少し南側にもう一つの前方後円墳が存在を主張している。行燈山古墳が東南東の方向を向いているのに対し、こちらは東北東の方角を指している。宮内庁によって第 12 代景行王の陵とされている渋谷向山（しぶたにむかいやま）古墳である。夏至の朝その後円部にカメラを置くと、図VI.14 に示されるカシミール 3D 画像が得られる。渋谷向山古墳の被葬者は、東北東にある龍王山から夏至の日に射し込む朝日を浴びることを願っているのである。ただし、図VI.14 をよく見ると、龍王山は水平面上で夏至の日の出が出る方角にあるが、山の端に出る太陽は少し南寄りから昇ってくる。Google map で渋谷向山古墳から龍王山へ

直線を引くと、前方後円墳の主軸は行燈山古墳ほど精確に峰をめざしておらず、わずかに峰から南寄りに傾いていて、夏至の日の出の方角を向くように築かれたのかもしれない。ともかく、近い年代に築かれた二つの前方後円墳は、互いに冬至の日の出と夏至の日の出を拝むことができるように方角を意識して設計された、と考えられる。

ついでに卑弥呼の墓だと主張する人のいる箸墓（はしはか）古墳のことも調べた。春分秋分の朝その後円部にカメラを置くと、図Ⅵ.15a に示されるカシミール 3D 画像が得られる。この古墳の東方には、三輪山が東南東に龍王山が東北東に見えるが、その方向に向いているわけではない。Google



図Ⅵ.15a 箸墓古墳から見る春分秋分の日の出



図Ⅵ.15b 箸墓古墳から見る夏至の日の出

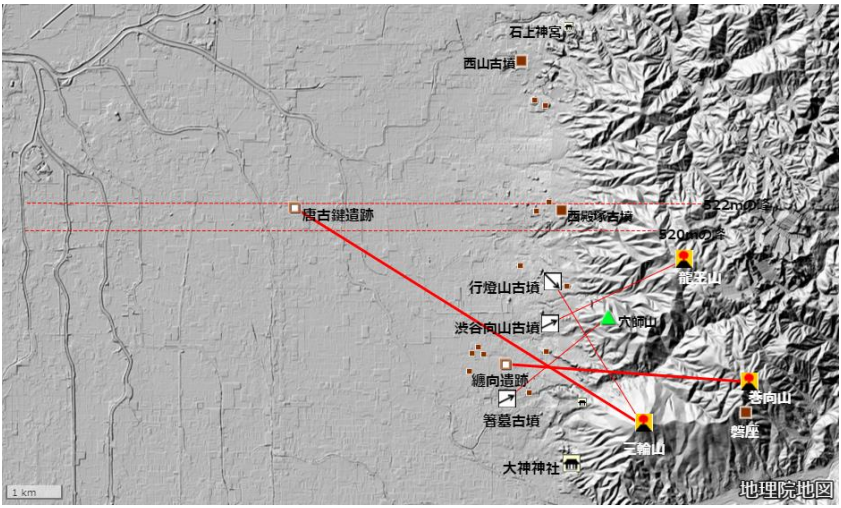
map で調べても、箸墓古墳の主軸は巻向山の頂きやデンノダイラの磐座の方向にも向いていない。箸墓古墳は、この地区で崇拝された三輪山・巻向山・龍王山の方角に敬意をはらっていないようだ。強いて探すと、箸墓古墳から東北東 2.8km のところにある標高 409m の穴師山(あなしやま)の方向を向いている。念のために Web を探すと、穴師山山頂の南側にある平坦部が地元で穴師坐兵主(あなしにますひょうず)神社の上社があったと言われるゲシノオオダイラ（夏至の大平）ではないかという記事があった。そこで語られている俗説に用心しなければいけないが、箸墓古墳の後円部にカメラを置くと、図VI.15b のような画像が得られる。この画像は夏至の日の出の方角に山並みが平坦に見えるところがあることを示し、夏至の大平(おおだいら)という呼び名に該当しそうだ。そうだとすれば、この地区でよく取り上げられる三つの山三輪山・巻向山・龍王山に加えて、穴師山も日の出を拝む標識の山だったということになる。

この第iv節で議論した遺跡・古墳と霊山と見立てることのできる山々を地理院地図の地形図に落として、それらの位置関係を図VI.16 に表示しておこう。この図には、それがいつ建てられたか知られていないが、三輪山の神殿である大神(おおみわ)神社と神宮の名をもつ石上(いそのかみ)神宮を書き入れてある。大きな前方後円墳である西殿塚古墳も加え、印だけだが小さな古墳も書き入れた。

ところで北條芳隆論文[44]が、龍王山の峰々こそが、そのあたりでも、また、遠く大阪平野でも古墳の配置を決定したと論じている。その論文では、北にある西山古墳と南の箸墓古墳の緯度の中央値北緯 34.5655 度を基準緯度線と考えている。参照するために、図VI.16 には、520m の峰を通るその緯度線を破線で描き、もう一本、522m の峰を通る東西線をその上に描いてある（おおよそ 522m の峰を通る緯度線上に唐古・鍵遺跡と西殿塚古墳が並んでいるのに意味があるだろうか）。

まず図Ⅵ.16 で、古墳時代前期の奈良盆地の人々が日の出をどのように崇めたかを考えてみよう。一見して、ここでは統一した見方が確立していなかったことが判る。弥生時代から、集落群を構成する二つの大きな共同体が三輪山と巻向山からの朝日を拝むのに適した場所を中心に形成された、と理解することはできる。しかし、大きな古墳はばらばらな方向を向いていて、どの山に関係づけるか強い規範があったようには思えない。この図には王の宮が書き入れてないが、『日本書紀』によれば、10 代王崇神～12 代王景行の宮はこの図の範囲にあった。奈良盆地に侵入してきた初代王が畝傍山のふもとに宮を築いて以来畝傍山の付近に宮を置いていたのが、10 代王から三輪山付近に宮を移したのには政治的な理由があったと考えるべきなのだろう（7 代孝霊王の宮が唐古・鍵遺跡の真西にあった理由の説明は存在するのだろうか）。崇神王が「肇国（はつくに）を御したすめら命（みこと）」と呼ばれるのは、この地域に本拠地を移したことと関係しているだろう。

ちなみに、「太陽の道」ということばを使い始めた小川光三[(2)]は、そ



図Ⅵ.16　奈良盆地の古墳時代前期の太陽崇拝様式

の王権を崇神王朝と呼んだ。しかし図VI.16は、奈良盆地でも九州北部に似た太陽崇拝があったことを示すものの、第i節で考えたような整頓された「太陽の道」観念があったことを主張していない。また、この地域では、九州の古墳時代の太陽の道に付随していただろう高天原の神々の体系に結びつく説話も知られていない。そして『日本書紀』は、奈良盆地の崇神王の時代に、『三国志』が邪馬壹国について記述したほど王国が発展しつつあるようすを書かない。邪馬壹国についてさえその呼称は適切でないが、奈良盆地に「王朝」と呼ぶことができるほどの体制があったとは思えない。

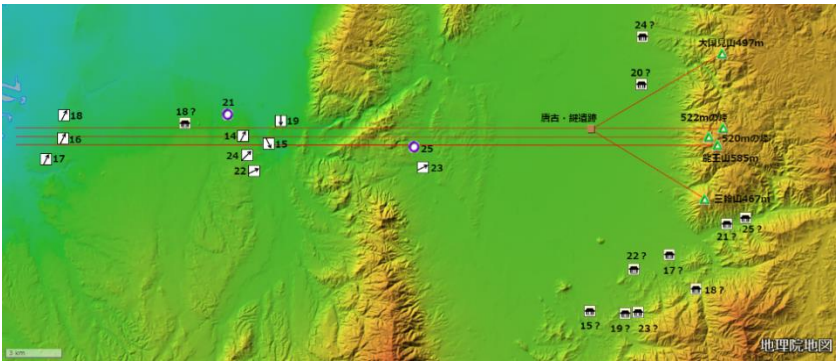
ここの文脈で重要なのは、太陽崇拝に関して三輪山を通る東西方向が特別に尊重されてはいなかったことである。図VI.16はその兆候をなんら示さない。その時代にはまだのちに西麓に建てられた大神神社のような神殿もなかったと考えられる。三輪山の神は大物主(おおものぬし)神とされるが、『日本書紀』はその神を「大三輪(おおみわ)神」と書く。『記・紀』がこの神を語るとき大歳(おおとし)神・大己貴(おおなむち)神または大国主(おおくにぬし)命と同一だと説くのは、説話の語りのなかで生じた混淆だと思われる[1]（大国主命が胸肩の方へ出かけたとき海上から現われた神が穀物神「大歳神」で、大国主命が国を治めるのを助けたかのように語られるのに対し、説話で卑俗な蛇神ともされる大物主神は異質の神である。奈良盆地の説話を、先頭の「大(おお)」という文字にことよせて変奏したにすぎないだろう。さらに大国主命と同一視すれば理は失われる）。

重要なのは、大物主神は遅く奈良盆地の説話に現われたにすぎず、『記・紀』神話の本筋である高天原の神ではないということである。倭国の王統につながるイザナギ・イザナミ→日神の系列とは関係ないということである。その太陽崇拝を、倭国の祭政一致へつながるものと見なすことはできない。図VI.16がそのことを図像で明示しているのである。奈良盆地には、統一的な規範のある太陽崇拝様式はなかった、と考えざるをえない。それに対して、図VI.7が示すように、九州北部の古墳

時代前期の「太陽の道」は明確な太陽崇拝の様式をもっていた。事物に関係づけられた宗教的事象の様式は、土器の様式と同様に歴史を理解する要素になる。九州北部の「太陽の道」はそれに対応する制度をもつ国家を示唆するのに、奈良盆地は古墳時代前期になってもそのような段階に至っていなかったと考えられる。

こんどは古墳時代後期の文明度を探るために、北條論文の議論も合わせて考察しよう。図Ⅵ.17 に、古墳時代後期に建設された大阪平野の巨大古墳も書き入れた図を前著[(1)]から転載しよう。それらの古墳は『日本書紀』記載の王の墓だとして王の名で呼ばれることが多いが、区別する便宜のために比定されている王の代数を数字で脇に書き添える。矢印の墓は前方後円墳で丸印は円墳を表わす。図Ⅵ.17 には、『日本書紀』が書くそれらの王の宮の所在を家型の印で書き入れ、そばに王の代数を添えてある。それを見ると、奈良盆地の王たちは一定の規範にしたがって王の宮の場所を決めたのではないと分かる。ここには、王がいる場所を都市に発展させて権力を強化しようとする意図が見られない。

図Ⅵ.16 と図Ⅵ.17 とを合わせて、総合的に古墳時代後期の奈良盆地の王権のことを考えてみよう。本書は、すでに述べたように、15 代王



図Ⅵ.17　古墳時代後期の奈良盆地の王の宮と古墳の所在

応神からの王統が前王家とは異なると考えている。古墳時代前期の王家の王たちの墓が奈良盆地の東の山並みのふもとに築かれたのに対し、15 代からの王たちの大きな前方後円墳は、その山並みから 30km も離れた大阪平野に築かれた。このことは、これらの王たちが系譜上前王家と異なるという考え方を支持するだろう。応神の父で 14 代王とされる仲哀の墓が応神陵とされる墳墓の近くにあるのも、前王家の王たちの続きのようには奈良盆地の東の山の辺に築かれなかった、と解釈することができる。図中の三本の赤い線は、これらの墳墓が東の龍王山山塊を崇拝して築かれたと考える北條の提案する緯度線に当たる。

応神に始まる王たちのとても規模の大きい前方後円墳は、その王権の権力の大きさを表現していると解釈され、近畿地方の王権が日本列島の支配者であったという現行パラダイムの物的証拠とされている。そして今も、『記・紀』の記述に従って、その権力はそれ以前の王権にさかのぼることができるとする見方が支配的である。図VI.17 の古墳が他の地域と比較しても大きいことが、その見方を支持すると考えられている。

しかし、図VI.17 を図VI.8 と比較してみれば、別の見方が浮かび上がる。図VI.17 も、図VI.16 と同様に、大阪平野の大きな墳墓が何か統一的な観点があってそこに築かれたという理由を示してはいない。すでに論じたように九州では、太陽の道上に王の墓や王の宮が置かれることが重要な要件であった。新羅でもそうだった。ところが、奈良盆地にはそのような要件を満たす王墓や王の宮はないし、宇佐宮と宗像大社のような大きな神殿もない。図VI.8 は、九州で体系的な観点から「太陽の道」が制定されたと主張する。重要な点は、九州と近畿地方の宗教的な太陽崇拝様式は異なり、九州だけに大きな領域全体をカバーする「太陽の道」と立派な神殿があることである。奈良盆地の王権が、自分のところにそういうものはないのに、遠く離れた九州に図VI.8 の示すよう

な体系的な太陽の道を制定し大きな神殿を創建したと想定することは不可能である。逆に九州にはすでに、奈良の王権とは異なる制度的な祭政一致の体制が形成され、その王が「太陽の道」を制定したという考えに導かれる。それを国家体制の確立と見なせることはすでに述べた。

この見方は、奈良盆地の王の宮が王の代替わりごとに移転したということによっていっそう支持される。一般的に国家とその都は、ある段階で一定の場所に王宮を置いて統治することによって発展する。そうしなければ王宮のまわりに都市が発展することはなく、世界中どこでもその段階を通過したと考えられる都市国家に進むことはできない。すでに『三国志』が、卑弥呼の都の相当な発展ぶりを記録していた。時代が進んで二つの大きな神殿を築くほどなら、中心にいる王の都もそれに対応できるほど発展したはずである。代替わりごとにつくられる宮は、そういう事態を想像させない。

大きな王墓は必ずしも大きな国家権力を意味しないと考えるべきである。実際、400年代、朝鮮半島と日本列島で最も強力な国家だったと考えられる高句麗で、大阪平野にあるほど大きな王墓は建設されなかった。百済や新羅との競争の方が国家にとって重要事だった。日本列島でも、倭王武の上表文が明かすように、まわりの国々を従属させ支配域を拡大し、さらに朝鮮半島へ進出することの方が重大事だった。そういう戦時的な国家運営には大きな資金が必要である。巨大な古墳を建設する物的・人的資源があれば、朝鮮半島の国々との競争に使われただろう。奈良盆地で古墳時代前期から大きな王墓が築かれたのは、王権がまだ領域国家をめざすほどの段階に至っていなかったのに、権威主義的だったということだろう。

ｖ．500年代の倭国

本章を終える前に、『記・紀』に記述されている国家体制にかかわる

重大な事件いわゆる「磐井の乱」を考えておこう。『日本書紀』は、継体王の 21 年夏に筑紫の国造磐井の反逆を語り、22 年冬に継体王の派遣した軍が筑紫の御井郡で討ったと書く。奈良盆地の王権に対する九州での反乱のように記されているこの記述は、ここまで本書が述べてきた見方と対立する。倭国史を論じる本書にとって避けて通れない問題である。

この問題について古田武彦[40]が、それは両地域のあいだの戦争だったが九州の王権は崩壊しなかった、と論じている。本書は、ここまで実証的な根拠を挙げて議論してきて、九州の王権が中国史書の記述する倭国だと考えている。この節では、磐井の引き起こした戦乱が九州の王権に対してどのようなものだったかを考察しよう。

『日本書紀』は継体紀の末尾に、継体王が在位 25 年目の冬に亡くなったと書いたあと、――「ある本には 28 年に亡くなったと記されているが、『百済本紀』が辛亥の年に“日本の天皇および太子・皇子がともにみまかった”と記している。辛亥の年は継体 25 年に当たるので、25 年に亡くなったとした」と註記し、さらに、「のちに勘考る者は（真実を）知るだろう」――とつけ足している。この箇所はこれまで軽視されてきたが、重大な問題をはらんでいる。

継体王の年代記を 3 年もずらすことが行なわれている。まず言えることは、中国文明をさかんに取り入れた倭の五王のあと 500 年代になっても奈良盆地には信頼できる年数の数え方がなかったことである。『日本書紀』は享年を 82 歳としているが、『古事記』は 43 歳としている。前の 82 歳は太陽暦の 1 年を 2 年と数えていると考えて半分の 41 歳とすると、口承によって伝わっていた『古事記』の年齢 43 歳に近づく。それでも、『日本書紀』が年代記を 3 年ずらしたことが影響を与えていると思われる。『日本書紀』の編纂者たちは、自分たちのしている編修作業で書き記す記事の年紀に自信がなかったかのようだ。

『日本書紀』また『上宮聖徳法王帝説』では継体の子の 27 代王安閑が即位するまでに 2 ないし 3 年の空位期間がある。後世の勘考(かんこう)者が編修した岩波書店の 1966 年発行の『日本史年表』[46]は、二通りの年表を併記している。継体 21 年(AD527 年)に磐井の乱、22 年(528 年)に磐井が斬られたとするのだが、一方で、辛亥の年(531 年)に前王家の娘を母とする 29 代欽明王が即位したとし、他方で、3 年の空位のあと 534 年と 536 年に尾張出身の女性を母とする異母兄安閑と宣化が順に即位し、弟の欽明王が即位したのは 540 年としている。この混乱はやはり、『日本書紀』が継体王の死亡年を 3 年ずらしたために起きた、と考えるのが妥当だろう。

この混乱を合理的に整序したい別の勘考者である筆者は次のような年紀を提案したい。――磐井の乱は 530 年に起きて 531 年に平定された。継体王が死んだのは 534 年で、欽明よりもかなり年長だった異母兄安閑が即位しそのあとを弟宣化が継ぎ、継体の子で前王家の血筋を引く若い欽明が即位したのはそのあと 540 年だ――と。

しかし、年紀を混乱させた『百済本紀』の記述が本当だったとしたらどうなるだろうか。まず、『日本書紀』の引用文“日本(やまと)の天皇および太子・皇子がともにみまかった”を原文に近づけなければならない。日本と書いて「やまと」と読ませるのは『日本書紀』のやり方である。朝鮮半島の歴史資料はみな 670 年以前には日本列島の国を「倭」と書いているから、『百済本紀』にも「倭」と書いてあったと考えるべきである。また、天皇という称号は 500 年代にはなかったから、本来ただ「王」と書かれていたはずで、「皇子」も「王子」が元の書き方だっただろう。すると、『百済本紀』には、「倭王及び太子・王子」がともに死んだと書かれていたと考えてよい。この大変な出来事は倭国の王家で起きたのである。

この出来事について、倭国の王家を九州王朝と呼ぶ古田武彦[40]は、『古事記』で「筑紫君石井」と表現される磐井の地位「筑紫君」が九州王朝の王を意味すると考える。そして、『日本書紀』が記述する「磐井の乱」を奈良盆地の継体王と九州王朝との全面的な戦争とし、磐井が斬られたことが『百済本紀』の「倭王が死んだ」という記述に対応する、と考える。たしかに「筑紫君」は大きな地域の長という響きをもつが、『日本書紀』には「水沼君」や「宗像君」という呼称も現われ、「君」が王を意味するかどうか定かでない。それに、戦史を読んでも、混乱した戦場で敗北した王と息子たちが同時に戦死したり死を選ぶことは少なかったように思う。むしろ、平時に王宮などにいる王家の家族を急襲するような出来事だったのではないだろうか（本能寺の変のような謀反（むほん）で、反逆者は王の一族か蘇我氏のような有力者？）。

磐井が引き起こしたのは倭国の内乱で、奈良盆地から継体王が送った軍勢は一方の側への援軍だった、と筆者は推測する。どこの王国でも起きたように、九州で長く続いた倭国で体制の弛緩と政治的な権力争いが起きてもおかしくない。けれども、二つの神殿宇佐宮と宗像大社をシンボルとする「太陽の道」はその後も存続した。それは、その「太陽の道」を主宰する王家の存続を意味する。そして、このあとの歴史展開を見ても日本列島で体制的な変化が起きたようには思われない。内乱は収束し、継体王は領地を獲得し、倭国の体制は維持された、と考えるのが順当である。次章がそのことを追認するだろう。

今している議論から二つの重大なことが明らかになる。第一に、継体紀の編修者が、『百済本紀』の言う「二人の王子とともに死んだ王」を継体王のことだとした判断は無理だということである。その編修者は、継体王の在位中の出来事と王子たちの家族関係を筆記することによって、歴史経過をかなり詳しく知り、継体王の子の欽明王が即位してその玄孫（やしゃご）が天武王であることも知っていた。もし『百済本紀』の言う「倭王

及び太子・王子」が「継体王と太子と王子」だと認定するとすれば、火災などのまれな事故以外に考えられるのは、襲撃されて殺されたということになるだろう。それでは、欽明王が父殺し・兄殺しのクー・デターを起こしたことになってしまう。継体王と王子たちの家族関係とその時代の出来事をよく知っていた継体紀の編修者が、「継体王と王子たち」が『百済本紀』の書く「倭王及び太子・王子」に合致すると考えたはずがない。見逃されてきたがこの理屈は動かせない。それでも、そういう事件が『日本書紀』に隠されていると考える人はいるだろうか。

こんな無理な議論を避けるには、『百済本紀』の記述する倭国の王家は奈良盆地の王家とは異なるとするほかない。われわれが考察している倭国とは中国史書と朝鮮半島の史書が記述する倭国だ、ということを忘れてはいけない。継体紀の編修者の後世の勘考者への問いかけは、中国・朝鮮の史書の書く倭国は奈良盆地の王が支配する王国とは異なる、という結論に導く。

第二点は、それにもかかわらず、『日本書紀』の編修者は、奈良盆地の王を倭国の王に比定したということである。『日本書紀』は、奈良盆地の王家のことを書きながら、奈良盆地で起きたことではないことを付加して、それを“日本国”の歴史として記述しようとしていることになる。「奈良盆地の王統が昔から日本列島を支配してきた」という『日本書紀』の主張は、そういうやり方で文章化されて、公認の歴史書として公布された、と考えるほかない。

倭国史を研究するのに国内にそういう歴史資料しか残っていないとなれば、研究手段は限られてしまう。それでもわれわれは、『日本書紀』の記述のなかから史実に近いものを探り出さなければならない。

参考文献

(1) 谷川修『倭国はここにあった　人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.

(2) 小川光三『大和の原像―知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.

(3) 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.

(4) 杉本智彦『カシミール 3D　GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.

(5) 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.

(6) 小林健彦 「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号, 2014 年.

(7) 服部英二 『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.

(8) 谷川修 http://hakkoan.net/蝶の雑記帳, 「85 ボロブドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.

(9) 井澤毅 「遺伝子の変化から見たイネの起源」, 日本醸造協会誌, 112 巻 1 号, 2017 年.

(10) Shinichiro Honda ホームページ「アワ, キビの起源」, 2020 年.

(11) Xuehui Huang, Nori Kurata, *et al.* A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice, *Nature* 490 (2012), pp.497-501.

(12) 倉田のり, 久保貴彦 http://first.lifesciencedb.jp/archives/ 6065, 2012.

(13) 谷川修 http://hakkoan.net/蝶の雑記帳, 「38 鵜飼と稲作の伝来」, 「38b 稲作と鵜飼をもたらした人々のお歯黒」, 2016 年.

(14) 谷川修 電子書籍『稲はどこから来たか　気候地理学的な推論』, 白江庵書房, 2022 年.

(15) Shinichiro Honda ホームページ「イネの起源 1」,「イネの起源 2』, 2018 年.

(16) S. A. Marcott *et al.* A Reconstruction of Regional and Global Temperature for the Past 11300 Years」, *Science* 399 (2013), pp.1198-1201.

(17) Wikipedia「海水準変動」, https://ja.wikipedia.org/wiki/海水準変動

(18) 近藤純正 「1993 年の大冷夏」, 天気(日本気象学会), 41 8, 1994 年.

(19) J. L. バック, 「Land Utilization in China」, 1937年.

考え方だけの孫引き.
(20) goo ブログ 地理講義 32 中国の農業 農業地図, 2011 年.
(21) https://j2.wikipedia.org/wiki/ケッペンの気候区分
(22) 宮本一夫ほか「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」, 九州大学学術情報リポジトリ.
(23) 原宗子「古代黄河流域の水稲作地点」, 流通経済大学 創立五十周年記念論文集 1, 2016 年.
(24) Robbeets M., Bouckaert, R., Conte, M. *et al.* Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages, *Nature* 599 (2021), pp.616-621.
(25) 藤尾慎一郎『日本の先史時代』, 中公新書, 2021 年.
(26) 李亨源「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」, (日本の)国立歴史民俗博物館研究報告 第185集, 2014年.
(27) 後藤直「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」, 第四紀研究33(5), 1994年.
(28) Yim Yang-Jai & Kira T., 日本生態学会誌 1975年, (図だけの孫引き).
(29) 佐藤洋一郎『稲の日本史』, 角川ソフィア文庫, 2018 年.
概略を「JAICAF お米のはなし 12, 14」で知ることができる.
(30) 国際気象海洋株式会社ホームページ.
(31) 中村大介「弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ」, かながわの遺跡展特別講演第2回.
(32) 可児弘明『鵜飼』, 中公新書, 1966 年.
(33) ファン ハイ リン 「お歯黒文化圏に関する試論」, シリーズ ベトナムシンポジウム 2013, 2013 年.
(34) 原三正『お歯黒の研究』, 人間の科学新社, 2006 年.
(35) 周達生 「中国の高床式住居」, 国立民族学博物館研究報告, 巻11 4号, 1987年.
(36) 浅川滋男 「中国の民家・住居史研究」, https://www.jstage. go.jp/article.

(37) 「土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」ホームページ.
(38) T. Izawa　Reloading DNA History in Rice Domestication, Plant and Cell Physiology, pcac073, 03 June, 2022年.
(39) 井澤毅 「イネが光周性花芽形成のモデルって本当ですか？」, 時間生物学 Vol. 25, No. 1, 2019 年.
(40) 古田武彦 『邪馬台国はなかった』, 朝日新聞社, 1971年.
(41) J. ダイアモンド 『昨日までの社会』, 日本経済新聞出版, 2013年.
(42) 原田大六 『平原弥生古墳』, 葦書房, 1991年.
(43) 前原市教育委員会編 『平原遺跡　前原市文化財調査報告書 第70集』, 1999.
(44) 北條芳隆 『古墳の方位と太陽』, 同成社, 2017年, 「景観史における前方後円墳の時代, 東の山と西の古墳」, 考古学研究第59巻4号, 2013年.
(45) 妹尾達彦 「江南文化の系譜：建康と洛陽(1)」、「六朝学術学会報」14, p69, 2013年.
(46) 歴史学研究会 『日本史年表』, 岩波書店, 1966年.

2024 年 10 月　霜始降　　海蝶　谷川修